

センターに関わる覚え書き

カイロセンターにはテヘラン・センター以来の長い歴史があります。テヘランから考えますと、西アジア地域研究センターとしては、2015年は50年の節目に当たるわけです。また、「歴代センター長より一言」の文章から、本カイロセンターはエジプトの人々、特にカイロに滞在した日本人にお世話になりながら、30年の歩みをとげて来たことがわかります。ここでは、本冊子を作成するにあたり、身近な方々に原稿をお願いいたしました。

西アジア地域研究センターに赴任され、テヘラン・センター閉鎖に立ち会われた上岡先生から一言を頂戴することができました。同じくテヘラン・センターに滞在された小谷先生から貴重なお写真を拝借いたしました。アンカラ・センターについては堀川先生からお原稿を頂戴しました。

また、カイロセンター内で行われた研究会は、本センターを拠点として主に若い方々が中心となり、運営されていたようです。その思い出を綴っていただきました。現在は、緊迫した中東情勢から留学生の方々も少なくこうした研究会はありません。いつの日にかなんらかの勉強会を開けるようにと思っております。

さらに、カイロに長く在住した鈴木登さんのことは、何名かのセンター長も触れていらっしやり、カイロセンター内にもビールと遺影が飾られていることから本冊子には書かせない人物と思います。そこで、お二人から原稿をいただきました。最後に、留学生で滞在した方々からの思い出の一言を集めて掲載いたしました。

1. 西アジア地域研究センター



テヘラン・センターにて
小谷仲男（富山大学名誉教授）

私がテヘラン・センターに駐在していた 1966 年 9 月、イラン国王がキュロス大王生誕 2500 年祭を盛大に催し、イラン王制の健在ぶりを国内外に示そうとしました。その式典に多くの世界的イラン学者を招聘し、日本からは足利惇氏、蒲生礼一、江上波夫の三先生が招かれ、そのさいにテヘラン・センターにも立ち寄られました。写真はその時、テヘラン・センターのヴェランダで記念撮影したものです。写真左から足利、蒲生、江上の三先生、そしてつづいてセンター職員の大野盛夫、H. フルタン、小谷仲男です。現在、写真の人物はみな故人となられ、私としては感慨無量です。

写真は私のカメラで三脚・セルフタイマーを使用して撮影しました。撮影日は 1966 年 9 月 4 日とメモしています。

テヘラン・センター
上岡弘二（東京外国語大学名誉教授）

1966 年に開設され、イラン・イラク戦争の勃発で 1981 年に閉鎖された日本学術振興会のテヘラン・センターは、「西アジア地域研究センター」The Japanese Institute of Iranian & West Asian Studies と称していた。所在地は 20 Kuche-ye Chaharom, Khyaban-e Villa, Tehran 15, (Tel. 894968, 894969)。1979 年のイスラーム革命後は、どの通りも殉教者の名前の付いたものに変更され Kuche-ye Panahi, Khyaban-e Nejatollahi となっているが、今もって乗り合いタクシーなどには Villa（「別荘」）の方が通りがよい。テヘラン大学へ行くにも便利な、静かで落ち着いた、緑の多い路地の奥に位置していた。

日本学術振興会の「海外連絡研究センター歴代派遣者一覧」に拠ると、テヘラン・センターへの最初の赴任者は故大野盛雄教授（東大・東洋文化研究所）で、派遣期間は 1966 年 3 月 16 日から同年 12 月 4 日である。それ以降、原則的に日本人研究者一名がセンターに常駐していた。主要業務は、イラン学界の情報収集、イラン人研究者との連携、日本からの研究者の研究援助、学術調査隊の器材の保管、ときに宿泊施設の提供などであった。ただし、どのようなサービスを提供するかは、必ずしも一定ではなかった印象がある。また、ほぼ数が多い順に歴史・考古・地域研究など専門分野の異なる研究者が、原則的に一年ごとに交代する形であったので、イラン人研究者との交流がその在任期間限りとなった嫌いも否定できない。このような問題点はあるにせよ、イランで調査研究を行う研究者に対して、重要な情報源、テヘランにおける安らぎの場として一貫してなくてはならない機能を果たしてきた。

当センターの最後の派遣者は筆者である。以下、個人的な思い出話になるが、お許し願いたい。筆者は 1980 年 3 月 17 日に赴任した。イラン研究者として、イラン・イスラーム革命の現場を体験しなければ、と、1978 年 5 月 1 日から 1980 年 3 月 31 日まで最長期間在任された大野盛雄先生の後任であった。同年 9 月 22 日テヘランのメフラーバード空港がイラク機に爆撃され、イラン・イ

ラク戦争が本格的に始まった。

混乱の中をバスでイスタンブールに移動し、一時日本に戻った。翌 81 年 3 月下旬、当時唯一テヘランに飛んでいたルフトハンザ機でフランクフルト経由テヘランに入り、センターをなんとか無事に閉鎖して帰国したのは、5 月 24 日のことであった。閉鎖の理由は、今後のイラン情勢が読み切れないこと、それに、端的にはイランに送金する術がなくなったことであった。当時の状況では客観的にも、不本意ながら、閉鎖に動かざるを得なかった。

センターの閉鎖に際して、助力をいただいた在テヘラン日本大使館の片倉邦雄公使、一期一会となったイラン人友人たち、長年センターのために献身的に働いてくれた現地職員のホセイン・フォルータン（Hosein Forutan）さん、彼のために特別に退職金を拠出していただいた学術振興会に、この場を借りて改めて感謝したい。テヘランは当時、極端なガソリン不足と厳しい交通規制で空が澄み切っていて、イラン富士と日本人が呼んでいたダマーヴァンド山（5671m）がいつもくっきりと見えた。喜寿の今もって密かに自分は危機に強い B 型人間だと自認し、前任者の大野先生に続き、現代イラン史の節目にその現場で立ち会えたことをとても幸いなことであったと感じている。

アンカラ・センター

堀川徹（京都外国語大学教授）

日本学術振興会西アジア地域研究派遣研究員として、私が妻と二人の子供とともにアンカラに赴いたのは 1983 年の 3 月であった。

アンカラの「西アジア地域研究センター」開設には、1981 年のテヘラン・センターが閉鎖に伴って、故護雅夫先生が尽力されたと聞いている。記録によれば、東洋文庫東アジア研究センターの梅村坦氏が 82 年の 1 月に派遣され、3 月に護先生、4 月から東海大学の小松久男氏が派遣されている。お三方のご苦勞によって開設されたセンターであるが、とくに恒常的な建物やオフィスを設けるのではなく、派遣員の住居がそのままセンターの役割を担うという形であった。梅村・護両氏は同年 5 月に帰国され、その後は小松氏が翌年 3 月までセンターの業務を担当された。私は小松氏を引き継ぎ、翌 84 年の 3 月まで、1 年余り派遣研究員としてアンカラに滞在することになる。

アンカラでは自分の研究のほかに、学術研究に関してわが国とトルコとを結ぶリエゾン・オフィスの役割を果たすよう求められていた。小松さんから引き継いだアシャウ（下）・アイランジのアパートは、家主が帰ってくるとのことで、4 月末にユーカル（上）・アイランジの家具付きアパートへと移転し、必然的にセンターもそちらへ移ることとなった。ここは、滞在中にも大変お世話になったアンカラ大学日本語学科の故プラット・オトカン氏の親戚が大家さんで、残りの月日をととても快適に過ごすことができた。季節ごとに日本学術振興会へ送った報告書の下書きを見ると、仕事としてトルコの国内情勢や学界の情報収集、トルコ人研究者との交流、わが国からの研究者・調査隊への便宜供与、留学生への支援などを行っていたことが確認できる。

日本から調査研究に来られた方々とお話するのは何よりの楽しみであったが、とくに印象に残っているのは、アブラナの研究にトルコを訪れた東北大学の故日向康吉氏である。日向氏はアブラナ発祥の地がアナトリア半島だと狙いを付けて来られたとのことで、「飛行機から大地一面に黄色

い花が見えて感激でした」というのが第一声であった。植物は原産地に近い程品種が多く見られるということで、アナトリアは原産地でないのなら二次的な中心地であり、ここから世界各地にアブラナ科の植物が伝播していった経緯を、江戸の小松菜に到るまで解説して下さった。また、関西大学の末尾至行氏に率いられた調査グループとは、部分的に水車の調査に同行してお手伝いした。水平方向に回転する水車とこの時初めて出会い、とても感動したことを今でも良く覚えている。これがご縁となって、末尾隊に参加していた流通経済大学の寺阪昭信氏を代表とするトルコ各地の地理学調査に、私も1987年以降参加させていただいた。

他には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の三木亘氏、永田雄三氏といった旧知の先輩方もセンターとなっていたわが家を訪れて、楽しく会食することができた。また、トルコ人研究者やご近所の方々とも互いに訪問し合って食事をするのが当たり前となり、わが家の客好きを増幅させることになった。ある日曜日の午後、永田氏が上述のオトカン氏と突然わが家を訪問された。釣りの帰りだと土産にくださった釣果は大きな川カマスであったが、アパートに備え付けられていたのは肉切り用の包丁だけで、さばくのに随分苦労した。またこの包丁で、魚屋の店頭にぶら下がっていた鰻に挑戦したこともある。あのかたい皮をどうしても切り裂くことができず、結局、筒切りにして腹の内側から刃を入れて中骨を取り除いた。臭みを抜くため、関東風に蒸してから蒲焼きにした。この鰻は意外に好評で、ホームシック気味であった知り合いにさし上げたところ、「これは正しくウナギだ！」と大層喜んで元気を取り戻してくれた。正月におせち紛いの料理を重箱に詰めて、長年トルコに留学していた旧友のアパートを訪ねたこともあった。とても喜んでもらったが、実はトルコで一番重宝したのがこの重箱であった。客を招いた時、前菜類をこれに詰めてテーブルの中央に置いておき、着席後に三段のお重をサッと広げる演出がトルコの方々に喜ばれた。妻が食事中に席を立たず会話に参加できたことも、トルコ人にはとくに好評であった。

長々と思い出話を書き連ねてしまったが、トルコでの1年間は、私にとってその後の研究活動の糧となるたいへん貴重な時間であった。また、家族にとっても有意義な経験となった。こうした機会を与えてくださった日本学術振興会と故護雅夫先生に、この機会に改めて心より感謝したい。

2. カイロセンター内でおこなわれた研究会

カイロセンターは、エジプトへ調査に訪れる主に文系の研究者や留学生にとってミーティングポイントや情報交換の場、図書館としても機能していました。学生が集まる機会が増えるにつれ、定期的に資料の講読や研究発表などもセンター内で始められるようになりました。研究会と呼ばれるものの中には、のちの懇話会・現代中東研究会に発展するような講演会タイプのもの、若手研究者・留学生を中心とした自主的な勉強会タイプのものなどがありますが、本稿では後者の勉強会タイプのものを取り扱いたいと思います。

2000年以降では、2001年から歴史・思想系を学ぶ留学生を中心にはじまった写本研究会、2002年ごろの中東史研究会、中東近代史資料鑑賞会、2003年のカイロ書店案内、2003-2005年ごろには

社会学・人類学系の留学生などによるカイロ・ジェンダー研究会、現代中東イスラーム世界・フィールド研究会、2009年の学生交流研究会、そのほかアラビア書道教室などがセンター内で開催されてきました。これらの研究会の中には、活動の成果を出版するなどして、もっと大きな研究会・組織へと発展していったものもあります。

これまで行われてきたいくつかの研究会に関わった人たちに、当時の思い出をうかがいました。

写本研究会：ナグワ先生の写本講読会

中町信孝（甲南大学教授）

ナグワ・ムスタファ・カーミル先生との出会いは2001年の春頃、当時在外研究でカイロに滞在されていた私市正年さんから、写本講読の良い先生がいるからと紹介されたのがきっかけだった。ダール・ル・クトゥブ（DK）の写本校訂部門で研究員をなさっている方で、以前は菊池忠純さんも学振センター長時代にこの先生から講読の手ほどきを受けていたというから、これは確かな先生だと確信し、留学仲間の柳沼豊さんや西野正已さんとともに、写本講読のレッスンを受けることにしたのだった。

ナグワ先生のレッスンは週に1回、学振事務所の一室を借りて行われた。最初の面会でどのようなやりとりがあったのかよく覚えていないが、まずはアイニーの『イクド・アル・ジュマーン』を教材にして読むことになった。底本は、私がイスタンブールのスレイマニエ図書館で取ってきたコピーを用いることになったが、同じテキストの別写本がDKにもマイクロ保存されていたので、こちらも並行して用いることになった。DK版のコピーについては、ナグワ先生のご厚意で、無料で使わせて頂いた。ところが、DK版のコピーの質が悪くてどうにも読みにくいので、私はついついスレイマニエ版ばかりを読むようになっていた。それを見とがめたナグワ先生は、「こんなハワーガの書いた写本が読みやすいですって？」と、驚きに堪えないという面持ちで笑っておられたものだった。先生が「ハワーガ（外国人）」と呼んだのはオスマン時代の写字生のことで、実際スレイマニエ版の筆写時期は18世紀と遅く、対してDK版は著者自筆本から直接書き写された15世紀の筆写本であった。そんなことは当時の私には及びも付かないことだった。

また、ナグワ先生は常々、校訂注を手書きのカードで取ることを薦めてくださっていたが、私はと言えば、本文も注もすべてワープロソフトで取っていた。先生は初めのうちはそんな私のやり方を注意して下さっていたが、じきに何も言わなくなった。しかし、その後私はノートパソコンの盗難に遭い、取りためた注のデータを一部失ってしまった。ナグワ先生の言うとおりにしていればと悔やんだものの、後の祭りであった。

ともあれ私の留学期間後半は、「ナグワ会」を中心に回っていたが、私の帰国後も後輩たちが会を継続してくれていると聞いて、喜んでいて、一度だけ、後輩たちの「ナグワ会」に顔を出したことがあった。その席で私は、その当時刊行されたばかりの英文拙稿の抜き刷りを先生に手渡した。「ナグワ会」での講読の成果とも言える拙稿を褒めてもらおうと思ったのである。ナグワ先生はそんな私の手土産をひとしきり褒めて下さった後、こうおっしゃった。

「ノブタカさん、エジプトの歴史研究なのだから、アラビア語で書かなくては。」
ナグワ先生の言いつけを未だ守れていない自分に、忸怩たる思いがしている。

カイロ・ジェンダー研究会
鳥山純子 (桜美林大学、学振特別研究員(PD))

カイロ・ジェンダー研究会は、2003年に平井文子所長のもとに始まった。当時の中心メンバーは、後藤絵美、千代崎未央、鳥山純子、嶺崎寛子、宮原麻子であった。それぞれ留学や駐在、現地での結婚といった理由からカイロに居住し、日ごろから学振研究センターを利用し研究や生活についての意見交換を行っていた。その中で発案されたのが「ジェンダー」に関わる勉強会であった。その数年前にカイロアメリカン大学に IGWS (Institute for Gender and Women's Studies, American University in Cairo 後に Cynthia Nelson Institute for Gender and Women's Studies と改名) が設立されるなど、「ジェンダー」は魅力ある新たな研究領域として中東研究の分野においても大きな関心を集め始めていた。また一歩センターの外に出れば、日々ベールを纏う女性が増え、素肌を覆うファッションの人気の高まる状況が目に見え込んできた。こうした現象を理解する上で、ジェンダーは非常に有効な、欠かせない概念であるというのが当時の参加者の共通認識だったのではないかと思う。

活動としては、研究発表と文献講読(日本語・英語・アラビア語)の二つを軸に週1回から2回のペースで勉強会を重ねていった。その後小林春夫所長のもとで、文献発表で取り上げた *Remaking Women: Feminism and Modernity in the Middle East* (1998. L. Abu-Lughod ed. Princeton University Press) の翻訳を開始し、2009年、明石書店から『「女性をつくりかえる」という思想—中東におけるフェミニズムと近代性』として出版した。

この研究会は、私がその後研究を続けていくにあたり非常に重要なものになった。それは、2000年代初頭から半ばにかけてのカイロという空間に身を置き、日々同じ社会現象を生きる同世代の研究者と、「ジェンダー」に関わる学術的な議論を重ねた経験によるものだと思っている。断片的にしか言語化できない「個人的な経験」を部分的であれ共有しているためか、当時の研究会メンバーの着想や問題意識には共感を覚え、触発されることが多い。また忌憚ない研究批評を交すことのできる得難い戦友としての関係も続いている。学術的知識と人的交流の双方において、研究会で得た成果は、今でも私の研究基盤となっている。

カイロ書店案内
原山隆広(東洋文庫)

早いもので、留学中に書店案内の改定版を作ったのが、もう10年以上前の話になっていました。その頃から、カイロ事務所を維持していくために何か目に見える成果をと言われるようになっており、当時お世話になっていた留学生の間でも出来ることがあればということ立ち上がった企画だったと記憶しています。

当初は、泉澤久美子さんの案内文に出てくる書店は今どうなっているのか訪ねてみる程度の計画でしたが、次第に話が大きくなり、気がつけばカイロ全域を対象にわかる限りの書店を網羅しようということになっていました。載せるからには実際に訪問して話を聞くという方針にしたことは、自らの首を絞めた感がありますが、夏に調査で歩きまわったさいに飲んだソビアやアサブは大変美味しかったです。また結果的には自分達の研究のためにもなりました。調査のまとめや地図作り等の作業のなかで、日々の水タバコ量が目に見えて増えていったのも、今となっては懐かしい思い出です。今ではカイロの出版事情や書店の状況も大きく変わってしまったかと思いますが、この案内がまだ何かの役に立っていれば幸いです。

現代中東イスラーム世界・フィールド研究会：フィールド研と学振事務所
丸山大介 (防衛大学校准教授)

2004年12月半ば頃だろうか。修士課程を休学してカイロに来ていた私は、京都大学大学院の新井一寛さんと早稲田大学大学院の吉村武典さんらと、ドッキのマクハーでシーシャ・トゥツファーハを吸いながら、若手主体の研究会を学振事務所で開催できないかという話で盛り上がっていた。後に「現代中東イスラーム世界・フィールド研究会」(略称・フィールド研)と名付けられるこの研究会は、そのやや冗長な名称が示す通り、学問領域、地域、研究対象などに制限を加えず、院生や若手研究者が集い、自由な討論と情報交換ができる場を目指して発足した。カイロに留学に来た研究者が気楽に参加し、しかし、真剣に議論できるような場を作りたいというのが発起人の強い願いだったと記憶している。



最初の開催は2005年1月14日。時のセンター長、小林春夫先生(東京学芸大学教授)のご理解とご支援を賜りながら、なんとか無事開催にこぎ着けることができた。第8回まではカイロのみで開催していたが、当初の参加者の多くが留学を終え帰国してからは、京都を拠点に移して活動を行っている(カイロ事務所での活動を含めた研究会の詳細は、下記のホームページを参照のこと。<https://sites.google.com/site/islamfield/>)。

2015年1月。フィールド研が誕生してからちょうど10年振りに、私は学振事務所を再訪した懐かしさで胸が一杯になりながら、建物入り口のバツワープに挨拶し、天井が高く薄暗いエントランスを通過して、階段を駆け上がる。学振事務所は、今も変わらず、来訪者を温かく迎えてくれているようだった。気が付くと、研究会を行った奥の部屋で、10年前の無鉄砲で、研究のイロハも知ら

ない学生だった自分を思い出し、はたしてこの10年の間にどのくらい成長できたのだろうかと自問自答していた。どうやら、学振事務所は私の研究生活の原点でもあるらしい。

研究会運営の難しさと楽しさを教えてくれたこのセンターが、これからも引き続き研究者が集い、交流できる場として維持、発展されていくことを心から願っている。

学生交流研究会：人と知の交差点から生まれたもの

片岡麻美（早稲田大学大学院修士課程修了、2009年カイロ留学）

2009年1月、カイロに留学し、学術振興会カイロ連絡センターの住所メモを握り締めた私を迎えてくれたのは、ザマレクの閑静な住宅街に佇むマンションの一角の温かなぬくもりでした。カイロの冬の寒さすら知らずに留学した私に、カイロに来なければ得られなかった知識や人々との出会いを、センターはもたらしてくれました。現在カイロで活動する、日エジプト青年交流団体 JEN YOUTH のもととなった活動である、日エジプト学生交流研究会も、センターでの出会いをきっかけに生まれたものです。

センターの定例懇話会の手伝いをしていた私は、カイロ大学日本語学科のエジプト人学生との会話の中で、日本人とエジプト人の学生が互いに相手の文化や歴史を研究しているにもかかわらず、出会う機会が少なく、研究対象国に住む同世代の意見を聞くことができないのはもったいないと考えました。エジプトの文化や歴史に対する現地の若者の率直な意見を聞く場が欲しい、日本に関心を持ってくれるエジプト人に対し、少しでも彼らの研究や学習の手助けをしたいという思いは、自然に私を日エジプト学生交流研究会の発足へと駆り立てました。



研究会の発足は、カイロ連絡センターに頼りきりでした。当時の大石センター長のご協力のもと、センターを研究会の開催場所として提供していただき、チラシ配布や懇親会の準備なども協力していただきました。当初は、参加者が30人を超え席が足りなくなる日もあれば、2、3人しかの日もあるなど、不安定な活動状況でした。しかし会を重ねるにつれ、参加者が積極的に提案してくれるようになり、エジプト人も運営メンバーに加わりました。それからは、研究発表だけでなく、エジプト音楽講座や日本武道の紹介など、様々な角度から交流を試み、相互理解を深めました。

日エジプト学生交流研究会は、参加人数の増加に伴い国際交流基金へと拠点を移し、エジプト人学生を主体とした、日エジプト青年交流団体 JEN YOUTH として活発に活動を続けています。おそ

らく今の JEN YOUTH の参加者たちは、日本人留学生が立ち上げた活動だと知らない人も多いと思います。ですが私は、カイロ連絡センターの一室で、ほんの数人の仲間とともに、試行錯誤しながら活動した日々を決して忘れることはないでしょう。

この場を借りてセンターに御礼申し上げるとともに、これからも、カイロ連絡センターが人と知の出会いの交差点として、日本人とエジプト人の研究・交流活動を支え続けていくことを、心より願っております。

3. センター足跡への証言-鈴木さんの思い出と留学生の頃

アブドッラハマーン 鈴木 登 ‘Abd al-Rahmān Noboru SUZUKI (職業：「アラビア語使い」)
近藤真実 (龍谷大学准教授)

日本学術振興会カイロ研究連絡センターが 30 周年を迎えるに際して、鈴木のことについても一言、とのお話をいただきました。彼はセンターを利用してお世話になっていた側ですが、亡くなってからもセンターにかかわる方々に名前を思い出していただけるというのは、伴侶としては嬉しい限りです。センターと彼とのかかわりということでは、私よりももっとよく知る方々がおられますし、本人もお墓の中で「そういうことじゃない。勝手に書かないでね」などと言っているかもしれません。そのようなところは、どうぞご寛恕願います。



2001年、ザマーレク、鈴木邸にて (佐藤次高先生、節子夫人提供)
The House of Mr. Suzuki, 2001 (Courtesy of Mrs Setsuko Sato)

にぎやかな人でしたが、私の印象に残るいくつかの姿のうちの一つは、胡坐をかいて、あつらえた大きな机の前で PC が本に向かって静かな姿です。後ろには本がぎっしりつまった天井までの本棚。他の部屋や廊下の壁も一面本棚。こまめな本屋巡りの賜物で、年に一度の国際ブックフェアにも毎年出掛けていました。センター長さんや若い研究者の方々とセンターで集合し、車に分乗して会場に行くのです。一日だけではなく、期間中何日も出掛けます。私もこれのお世話になったことがあります。エジプト内外の多くの書店が集まりますから、研究する者にとっては願ってもな

い機会。懐の許す限りたくさん購入したいのですが、会場からどうやって運ぶかが困りものでしたので、本当に助かったのを覚えています。皆で出掛けるこのやり方は今も続いているようです。

鈴木がよく言っていたことの中に、「出会い」が大切だということがあります。カイロではよい出会いがたくさんあったのだそうです。ブックフェアへ皆で出掛けることもその一つだったのではないのでしょうか。そして定例懇話会での人や知識との出会いもそうだったのではないかと思います。この会にもよく参加させていただいており、フラットの冷蔵庫の扉には案内が貼ってあることもありました。自分も人も言いたいことを言い、やりたいことをやればよいという考えでしたから、懇話会の場でもいろいろ思うところを言っていたようです。しかも声が大きい。困らされた方もおられるでしょうが、私としてはそればかりではなかったはずだと思っております。

センターに、鈴木にかわってお礼を申し上げたいと思います。今後もセンターがよい出会いの場としてますます発展してゆかれますよう、祈念いたします。

鈴木さんとの思い出

熊倉和歌子（東京大学特任研究員）

アブドゥル・ラフマーン・鈴木 登さんは、カイロに41年間居住した日本人である。ご本人はみずからを「アラビア語使い」と称していたが、ジャーナリストであり、古書店「鈴古堂」の店主であり、時にはカイロ日本人学校のアラビア語教師であり、と様々な顔を持っていた。そのため、世代を超えた多方面の方々との交流があり、いつも誰かしらが鈴木さんを訪れ、鈴木邸では毎夜のごとく宴会がおこなわれていた。したがって、私よりも鈴木さんのことをよく知る方々はたくさんおられるため、そうした方々を差し置いて私がこの紙面を埋めることには大変な重荷を感じる。しかし、緊禪一番、お世話になった鈴木さんへのご恩に報いるべく、「留学生としての私の目に写った鈴木さん」について書いてみたいと思う。...まずは出会いから。

私が鈴木さんを初めてお見かけしたのは、2003年のカイロ国際ブックフェアの会場であった。当時、私は修士の1年生で、初めて一人でエジプトを訪れたのであった。アラビア語は大学で基礎的な内容を一通り習ったものの、会話は全くできないという状況で、とにかくやっとの思いで会場にたどり着いたのを覚えている。しかし、ほっとするのも束の間、膨大なアラビア語の書籍を前に、期間内にこの山の中から目当ての歴史書を見つけることができるのだろうかと思案に暮れていた。

そのとき、見るからに日本人と思しき男性が、エジプト人と堂々としたアラビア語で話をしているのを目撃した。言葉が通じない異国の地で呆然としていた私にとっては渡りに船。藁にもすがる思いでその男性に「日本人の方ですか」と話しかけていた。続けて、私はこう言った、「私はアラビア語を読むことはできるのですが、話すことができないので、店主に私が探している本を持っているかどうか代わりに尋ねてもらえませんか」と。これがこの男性の逆鱗に触れた。「君は自分が何者かも名乗らないで、人にもものを頼むのか！」と。

まさかこのような展開になろうとは。私は、今会ったばかりのこの男性に頭ごなしに非難されたことに「逆ギレ」し、その場を立ち去ったのだと思うが、よく覚えていない。それだけこの出来事

は、私にとってディープ・インパクトであった。数日たっても、この男性への苛立ちはおさまらず、悶々と過ごしていたのであったが、考えれば考えるほど男性の発言が妥当に思えてきて、いつしか苛立つ気持ちは自省の念に変わっていた。

帰国日がせまったある日、学振懇話会があることを知り、初めて参加させていただくことになった。学振を訪れると、なんと、先日の男性がいるではないか。先方が私の存在を認めて「あ！」と発するや否や、私は先日の無礼をお詫びし、改めて自己紹介をし、自分があれから何を考えたかを素直に述べた。すると、男性の顔は急に優しい表情に変わり、「私は鈴木です」と言った。続けて、なぜ、あのとき声を荒げたかについて説明しはじめた。第一に、エジプトでは「アッサラーム・アレイクム（あなたがたに平安あれ）」という挨拶からはじまり、相手が元気であるか、相手の家族に変わりがないかを家族のメンバーひとりひとりについて尋ねて、その一通りの挨拶がおわってからはじめて本題に入ることができるのだということである。挨拶もなく、しかも自分の名も名乗らずに、相手をお願いをするなぞもってのほか、無礼の極みというわけである。第二に、アラビア語を読むことができるというのであれば、筆談でも会話は成立するではないか。そのような知恵も働かないようでは、読めるかどうかとも疑わしいとのこと。無論、いずれについても反論の余地はなく、ただ反省するばかりであった。しかし、その後は「仲直りの握手」を交わし、私の心のわだかまりはすっかり溶け、帰国となったのであった。かくして、これが鈴木さんとの出会いであった。

私はその後カイロ大学に留学する機会を得て、2005年か7年までカイロに滞在することになった。2年間の留学中に、新たな留学生を迎えることもあれば、帰国の途につく先輩を送り出すこともあった。そのようなときには必ず鈴木さんも一緒だった。特に、帰国前夜の送別会は、鈴木さん主催のもと鈴木邸で行われ、家主自ら腕をふるって豪華絢爛のお料理を出してくださった。あるときには、中世アッバース朝の宮廷料理を食べたいという主賓のリクエストに応え、鈴木さんは、アラビア語で書かれた中世の料理書を読み、そのレシピを見事に再現したことがあったほどである。留学生たちは、そのようなイベント以外でも、日常的に鈴木邸に集まり、皆で、鈴木さんが愛飲していたオールド・パァを片手に、夜な夜な語り合った。鈴木邸の壁という壁にはすべて本棚が据え付けられており、ぎっしりとアラビア語の書籍が並べられていた。歴史書から現代の社会問題までの書籍、また、中には鈴木さんが毎日欠かさずに集めていた新聞の切り抜きを収めたスクラップブックもあった。それらを眺めながら、鈴木さんの苦労話を聞いたものである。

このような鈴木さんとの交流は、おそらくどの留学生も、留学がおわった後も継続したことと思う。短期で調査に来たときは必ず、初日に鈴木さんと杯を交わすのが習わしだという先輩もいた。私自身も、エジプトに調査で訪れたときには、「すーさん、今日は中華が食べたい！」とわがまを言って、毎日のように鈴木邸で夕飯をご馳走になった。夏の極暑のなか、文書館での作業を終え、シャッカ（アパート）の暗い階段を昇ったものだ。

鈴木邸のドアベルを鳴らすと、「はいはい」という威勢のよい声とともにハチマキ姿の鈴木さんが現れて、「台所が暑くってしょうがないんだよ」と言いながら、リクエストの中華風野菜炒めを準備してくれていた鈴木さんの姿が今でも鮮やかに思い出される。その後はステラビールを飲みながら、まずは私が今日の文書館での発見を報告し、鈴木さんがコメントをする、という時間を過

ごしたのであった。

思えば、カイロでの研究生活の思い出のなかには常に鈴木さんが現れる。その理由は、威勢のいい物言いと強烈な個性だけではない。それは、留学生たちが、鈴木さんを媒介者として結ばれていたためである。そして、そのネットワークは留学生のなかだけにとどまらず、先生方や、研究以外の分野で活躍されている方々とも結びついている。鈴木さんが亡くなられてからは、鈴木さんのいないカイロを訪れるのが怖かった。現実を受け入れたくなかったのであろう。そのような思いを抱いた人は少なくなかったのではないか。しかし、徐々にそのような喪失感から少し立ち直り、今では鈴木さんとの思い出話を酒の肴に、集うことができるようになった。鈴木さんは今でも、カイロに集う私たちを結びつけてくれている。

青春の地カイロの思い出

東長 靖（京都大学教授）

1986年から88年までの2年間は、私の20代後半にあたる。青春の時期をカイロで暮らして、本当によかったと思っている。ここに来るまでの私は、自分のイスラーム研究に行き詰まりを感じ、このまま続けていっていいのかと疑問を感じていた。エジプトに住んで、エジプト人と触れ合って、その明るさに新しい世界を見せられた。こういういい人たちが現に生きているイスラームは、きっと理解できるはずだし、それを理解したいと心の底から思った。そのことが、今日までイスラーム研究者を続けていることの原動力になっている。

当時は、日本からの留学生も多く、主だったところでも、東大の飯塚君（現東京外国語大学教授）、中田君（現同志社大学特任教授）、赤堀君（現上智大学教授）、慶応の長谷部君（現慶応大学教授）らが同じカイロの空気を吸っていた。彼らと、月に一度会う機会を与えてくれたのが、学振カイロ事務所の研究会である。大塚和夫先生や花田宇秋先生が、この月例研究会を主催しておられた。友人たちの新しい研究の展開を聞くのも楽しかったし、研究会後の日本食パーティーも楽しみだった。

最近エジプトにはとんとご無沙汰で、もっぱら夏はトルコのイスタンブルで過ごしているが、やはりカイロは青春の地、第2のふるさとである。カイロを訪れる度に、年甲斐もなくスキップしてしまうのだ。（*当時のエジプトの所属 カイロ大学大学院文学研究科哲学科聴講生（文部省アジア諸国等派遣留学生） *当時の日本の所属 東京大学大学院人文科学系研究科博士課程）



1986年のカイロ大学哲学科学生たちとの旅行（マラーキヤー） The Trip with students of Department of Philosophy, Cairo University, in 1986(Maraqiya)



アグーザのホームステイ先 1987年撮影 At the staying home, Aguzza, 1987

28年分の感謝をカイロ研究連絡センターに
赤堀雅幸（上智大学教授）

カイロではお米などがあまり手に入らなかったり、地方に行けば水道や電気などのインフラを欠くこともよくあったりしましたが、留学期間は概して平穏な時代だったと思います。それもあってか、留学生は多く、私が留学を開始したときには、東長靖氏、中田考氏がすでにおり、長谷部史彦氏は同じ時期に、翌年に大稔哲也氏がやってきました。飯塚正人氏が大使館専門調査員を務めていた時期でもあり、また、考古学分野では長谷川奏氏を初めとして長短期にわたり数多くの学生が滞在していました。東京外大の学部学生の留学先もエジプトでした。

事件と言えば、1990年になると湾岸紛争があつて、都市部ではクウェイト人の避難者を見かけることが多くなり、年末にはヨルダンなどから待避した日本人がカイロに滞在していました。1991年1月の湾岸戦争開戦と共に、大使館からは退去勧奨がなされ、私の留学は予定より若干早く（元々、2年間の予定を1年以上延ばしていたのではあります）、やや唐突に終わりを告げました。

当時のセンターは、センター長の住居と一体であり、御家族で、あるいは単身で1年ごとに長が交代していました。私が1988年1月8日にカイロに降り立ったときのセンター長は、大塚和夫先生で、わざわざカイロ空港まで出迎えてくれました（甘やかしですね）。夜に歓迎会も開いてくださいましたが、ザマーレク・ペンションからセンターまで歩いて3分ほどなのに、夕闇の中、方形の街路にとまどつて、早速道に迷ったのを覚えています。以降、長期留学中には花田宇秋先生、鎌田繁先生、岡崎桂二先生がセンター長を務められました。赤堀の活動拠点がカイロからアレクサンドリアに移り、西部砂漠のマルサー・マトゥルーフから村へとさらに離れていったので、年度が進むにつれ、センターを訪れる機会は減っていきましたが、訪れる度、どのセンター長からも何くれとなく便宜を図っていただきました。その後も、エジプトを訪れる度に一度はセンターに立ち寄り、歴代のセンター長にお世話になってきました。

その一方、2008年11月には上智大学がセンターの一隅をお借りして、カイロ研究センターを開設するという出来事がありました。これは、2007年末の閣議決定「独立行政法人整理合理化計画」中において、ナイロビとカイロの学振センターの廃止が言及されたことが発端です。今ではすっかり過去の出来事になっていますが、このときにセンターは存続の危機にさらされており、日本中東学会は存続を希望する日本学術振興会と連携し、関連諸機関にも呼びかけて、要望書を提出しています。それと平行して、上智大学が振興会から依頼されたのが、大学等の海外活動支援事業として上智大学の拠点を置くことでした。当時、中東学会の会長が私市正年氏、事務局長が私だったこともあり、学会の了解も得て、上智大学はカイロ研究センターを開設し、今日にいたっています。実際には一大学が海外で拠点を維持するのはたいへんなことですし、振興会も上智のセンターの開設の経緯は（残念なことに）担当者に伝承されていないようですが、上智大学としては将来の発展の芽として大切にしておこうと考えています。

上智大学カイロ研究センターを含め、歴代センター長のご厚情に感謝するとともに、未来のセンター長には変わらぬご協力をいただけますようお願い申し上げます。（*エジプト留学身分と期間 文部省アジア諸国等派遣留学生（1998年1月～1990年3月末まで）滞在期間 1988年1月～1991年1月*当時の日本での所属 東京大学大学院社会学研究科博士課程）

時は流れ、人もカイロも変わって行くけれど...

飯塚正人（東京外国語大学教授）

私の二度の長期滞在時、ともにカイロはおおむね平和で安全でしたが、1991年初頭の湾岸戦争でエジプトが多国籍軍に加わった結果、90年代前半には欧米からの投資が活況を呈すこととなり、80年代にはしばしば直面していた物不足も解消。いわゆる「洋食」を提供するレストランも劇的に増えました。88年5月に日本大使館に赴任した時点で、私と同年代の東長靖、中田考、赤堀雅幸、長谷部史彦といった面々がすでにカイロに留学しており、その後、大稔哲也さんも加わりました。一方、95～96年当時の大学院生は近藤真美さんくらいだったような気がしますが、AUCには酒井啓子さんが籍を置かれており、早稲田大学や中近東文化センターが活発な発掘活動を続けておられました。

私が初めてセンターにお邪魔したのは、修士論文を提出し終えた1988年1月のことですが、その時初めてお目にかかった大塚和夫先生とはその後、先生がお亡くなりになるまで、深いお付き合いをさせていただきました。88年5月に日本大使館に赴任した際、故佐藤次高先生の勧めで、同年2月に刊行されたばかりの『日本歴史学界の回顧と展望 西アジア・アフリカ 1949～85』をセンターに寄贈するために持参したのも懐かしい思い出です。花田宇秋センター長には私からではなく、佐藤先生からの贈り物と誤解されてしまったようですが。89年には恩師のひとりである鎌田繁先生がセンターに駐在されましたが、私は大使館での仕事が忙しく、時折コメなどの不足物資を補給させていただく程度のお付き合いしかできなかったように思います。他方、95～96年のカイロ滞在時は、時間が自由になる一研究者でしたので、月に一度はセンターを訪れ、菊池忠純先生・川本正知先生に夕飯などご馳走になりながら、鈴木登さんや近藤真美さん、また当時、国際交流基金で日本語を教えておられた東京外大卒業生の花田久美子さんたちと楽しく情報交換などいたしました。時の流れは速いもので、あれから20有余年。鬼籍に入られた方も少なくありませんが、カイロ研究連絡センターが今後も日本からエジプトを訪れる研究者にとって有意義な情報交換の場、かつ日本とエジプトの学術交流の結節点であり続けることを祈念いたします。（*エジプト留学身分と期間 在エジプト・アラブ共和国日本国大使館・専門調査員（1988～1990）*当時の日本での所属 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助手（1995～1996））

Memories of the JSPS Center in Cairo

The JSPS center in Cairo has a long history tied to the JSPS center in Tehran and Ankara. 2015 marks the 50th anniversary of the establishment of the Tehran center. In the messages from former directors of the JSPS Cairo center, we see that taking care of the Cairo center over these thirty years has been a collaborative effort by the local Egyptians and the Japanese visitors to their country. To create this booklet, we asked former directors to share their memories and gathered writings from many people affiliated with the center over the years. Here not only the Cairo center but also the Tehran center and the Ankara center are dealt with.

Prof. Kamioka, who worked at the JSPS Tehran center and was present for its official closing, wrote about his experiences there. Prof. Odani, who had also lived at the center, lent us some very important photos of researchers in the old days. Prof. Horikawa, who worked at the JSPS Ankara center wrote about his daily life in Turkey at that time.

The study groups at the Cairo center were mainly run by younger researchers who have kindly written about how those groups got started and their cherished memories of them. Currently, there are no study groups at the Cairo center. Due to harsh conditions in the Middle East, there are now very few exchange students from Japan. We hope to someday resume the study groups.

Several previous directors mentioned Mr. Noboru Suzuki, who lived in Cairo for quite a long time. A picture of him enjoying a beer hangs in the Cairo center. He was a crucial figure in the history of the center, so two of his associates have taken up the task of writing about his time at the center.

And several noted scholars who once lived in Cairo as foreign exchange students also wrote about their recollections from that time.

1. The Japanese Institute of West Asian Studies

At the Tehran Center

Nakao Odani (Professor Emeritus, University of Toyama)

In October 1966 when I was living at the JSPS Tehran center, the Shah of Iran, intending to show the enduring strength of the Iranian monarchy, held a celebration marking the 2500th year of the Persian Empire. He invited many world-renowned Iranologists to the event, including Prof. Atsueji Ashikaga, Prof. Reiichi Gamo, and Prof. Namio Egami from Japan. While in Tehran, these researchers visited the JSPS Tehran center. A keepsake photo was taken with my camera using a tripod and a timer on the verandah of the Tehran center. Shown in the photo are, from the left, Prof. Ashikaga, Prof. Gamo, Prof. Egami, staff members at the center, Prof. Ohno, Mr. H. Fultan, and I, Nakao Odani. All the people in the photo are deceased, except me. So my heart is filled with deep emotion when I see this picture. *See plate on p.100

The Tehran Center

Koji Kamioka (Professor Emeritus, Tokyo University of Foreign Studies)

The JSPS Tehran center was established in 1966 and was closed in 1981 with the onset of the Iran-Iraq War. The center was located at 20 Kuche-ye Chaharom, Khiyaban-e Villa, Tehran 15 (Tel. 894968, 894969). After the Iranian Revolution of 1979, all the streets were renamed after people who had died in the revolution. The street is now known as Kuche-ye Panahi, Khiyaban-e Nejatollahi. However, the name Villa is still quite familiar to taxi drivers. The building was located at the end of a sedate alleyway with many plants, not far from Tehran University.

According to the listings of Japanese staff assigned to JSPS international centers, the first person posted in Tehran was Prof. Morio Ohno (Institute of Oriental Culture, the University of Tokyo), who lived in Tehran from 16th March to 4th December 1966. After that, there was essentially always at least one Japanese researcher stationed at the Tehran center. Their main responsibilities were to collect information from Iranian academic institutions, collaborate with Iranian researchers, support visiting Japanese researchers, house survey equipment, and occasionally provide accommodations for visitors. I imagine the nature of the services offered varied with the need. And the people appointed as directors of the center had different fields of specialization that changed from year to year, History, then Archaeology, then Area Studies, and so on. It should be noted that these research exchange assignments were limited to one year. There were occasional problems, but the Tehran center was an important source of information and a place to relax in Tehran.

The last director of the Tehran center was me. I would like to share a few of my memories. I arrived in Tehran on 17th March 1980. I was an Iranian studies specialist who had lived through the Iranian Revolution. I was successor to Prof. Ohno who had held the director's position the longest, nearly two years, from 1st May 1978 to 31st March 1980. On 22nd September 1980, the Iran-Iraq war commenced with Iraqi forces bombing Tehran's Mehrabad Airport. After fleeing to Istanbul by bus in a state of confusion, I went home to Japan for a while. At the end of March 1981, I flew back to Tehran via Frankfurt on Lufthanza, which was the only airline offering service to Tehran at that time. I did everything possible to close down the Tehran center without incident, and went back to Japan on 24th May. The reasons for the closure were the unstable conditions inside Iran and the inability to transfer funds in or out of the country. Objectively speaking, closing the Tehran Office center was the only option.

I would like to thank the following people: Japanese Embassy in Iran Counselor Kunio Katakura for his assistance, all the Iranian friends I once knew, the Tehran center's long-serving administrative assistant Mr. Hosein Forutan, and the JSPS for providing him with a special retirement allowance. The heavy restrictions on traffic and extreme shortage of petrol at that time left the sky of Tehran quite serene, with Mount Demavand (5671m), known by the local Japanese nationals as Iran's Mount Fuji, always clearly visible. In Japan, some say that people with blood type B, like myself, are strong in a crisis. As I reach my seventy-seventh birthday, I am now very grateful to have witnessed firsthand these era-defining major

events in modern Iranian history, and to have followed in the footsteps of my predecessor, Prof. Ohno.

The Ankara Center

Toru Horikawa (Professor, Kyoto University of Foreign Studies)

In March 1983, I moved, with my wife and two children, to Turkey to work at the JSPS Ankara center.

I had heard that the late Prof. Masao Mori had worked hard to establish the Ankara center due to the closure of the Tehran center in 1981. According to the documents, Mr. Hiroshi Umemura from the Toyo Bunko Library was there in January 1982, Prof. Mori in March, and Mr. Hisao Komatsu in April. The Ankara center was established through the efforts of these three people. The location of the center changed more than once, but there was always someone acting as the director of the JSPS Ankara center. Mr. Umemura and Prof. Mori returned to Japan in March 1982. Mr. Komatsu stayed on until March 1983. I succeeded Mr. Komatsu, and stayed there for around one year, until March 1984.

In addition to my research, I was tasked with liaising between Turkey and Japan for joint research projects. The owner of the Aşağı Ayrancı (Lower Ayrancı) apartment I had inherited from Mr. Komatsu was about to return, so I had to move to Yukarı Ayrancı (Upper Ayrancı) with all the furniture, which meant that the JSPS Ankara center was also relocating to Upper Ayrancı. The owner was the relative of the late Prof. Pulat Otkan in the department of Japanese Language at Ankara University, who helped me out numerous times and made the remainder of my stay very comfortable. When I now look over the periodic reports I sent to the JSPS headquarters, my responsibilities included collecting information about academic institutions in and around Turkey, interacting with Turkish researchers, assisting visiting researchers from Japan, and helping out Japanese students in Turkey.

I most enjoyed talking with visiting researchers from Japan, such as the late Mr. Kokichi Hinata of Tohoku University who came to study canola flowers and left a deep impression on me. Mr. Hinata had surmised the point of origin for flowering canola plants to be Anatolia, and visited to confirm that. The first thing he said was “I was so impressed seeing the bright yellow flowers through my window as we flew in”. Canola plants have many rare variants in this area, so if Anatolia wasn’t their exact point of origin, it was surely a secondary point of diversification. He explained that canola plants spread across Asia from Anatolia to become the *komatsuna* plants (a species of *cruciferae*) found in Japan since the Edo era. I also helped Mr. Sueo Yoshiyuki conduct a group survey of watermills. I clearly remember being very impressed the first time I saw a horizontally rotating watermill. Mr. Akinobu Terasaka from Ryutsu Keizai University was a member of the last of the research group I dealt with. That led to me joining a geographical survey team supervised by Mr. Terasaka in various parts of Turkey from 1987.

Mr. Wataru Miki from the TUFSS Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, and old friend Mr. Yuzo Nagata came to my apartment for a lovely dinner. This became a common occurrence. Turkish researchers and other neighbors would join for a meal at my increasingly popular home. One Sunday afternoon, Mr. Nagata dropped by unexpectedly with the previously mentioned Mr. Otkan.

They brought me a pike they had just caught while fishing. It was quite challenging cleaning the fish with only the cleaver I had in my apartment. Another time, I had trouble using that same cleaver to prepare an eel I bought at a store. I couldn't cut through its hard skin. I finally managed to cut the eel into round slices, and remove the bones with the back side of the cleaver. To reduce the odor, I steamed and broiled it, like they do in the Kanto area. My friends liked the taste of the eel, so I gave it to a Japanese friend who was feeling homesick. "This is the real thing", he said, recovering soon thereafter. Once, I visited an old friend who had been doing research in Turkey for a very long time. I brought him special foods traditionally eaten in Japan on New Years Day and served in a traditional Japanese *jubako* box designed for presenting food. He was delighted, and the *jubako* box ended up being a useful item in Turkey. Whenever we invited guests over, we put out appetizers in this *jubako* box in the center of the table. Our Turkish guests were interested with how the boxes easily expanded into three tiers. I know it was especially popular with our Turkish guests because my wife joined in the conversation at the table and never left.

Perhaps I've rambled on too long, but my year in Turkey was a very valuable experience that has stimulated my research activities since. It was also a priceless experience for my family. I would like to express my sincere gratitude once again to the JSPS and to the late Prof. Masao Mori for giving me this chance.

2. Study Groups Presented at the JSPS Cairo Center

The Cairo center served as a meeting place and as a source of information. It was like a library for Japanese exchange students and researchers in Egypt, who were mainly specialists in the humanities. To provide more opportunities for students to meet, a series of text readings and research presentations was gradually introduced at the Cairo center. There are two types of events held at the Cairo center. One is periodic lectures, including *konwakai* (open lectures) and *gendai chuto kenkyukai* (lectures on the modern Middle East). The other is independent study groups for students and young researchers living in Egypt. I will explain about the independent study groups.

Starting around the year 2000, a variety of independent study groups were established. These included 1) the Arabic Manuscript Study Group, which was mainly comprised of students of history and philosophy, formed in 2001; 2) the Middle East Historical Studies Group, formed in around 2002; 3) the Appreciation of Modern Middle East Historical Sources Group, also formed in around 2002; 4) the Bookshops of Cairo Research Group, formed in 2003; 5) the Cairo Gender Studies Group, which was mainly students of sociology and anthropology and ran from 2003 to 2005; 6) the Modern Middle East and Islamic World Field Studies Group, which also ran from 2003 to 2005; 7) the Student Interaction Group, formed in 2009; and finally 8) the Arabic Calligraphy Study Group. Some of these study groups published their findings, and some established formal associations.

Here are some of the memories of these groups shared by people involved with them.

The Arabic Manuscript Study Group: Manuscript Reading with Madame. Nagwa
Nobutaka Nakamachi (Professor, Konan University)

I was introduced to Prof. Madame Mustafa Kamil in the spring in 2001 by Mr. Masatoshi Kisaichi, who was doing research work in Cairo and mentioned that Madame Nagwa would be a good teacher for manuscript reading. Prof. Nagwa was a researcher at the Egyptian National Library and Archives (aka Dar al Kutb). I learned that when Mr. Tadayoshi Kikuchi had served as director of the Cairo center, Madame Nagwa had given him instruction in reading Arabic manuscripts. When I heard this, I created the Arabic Manuscript study group with Japanese exchange students Mr. Yutaka Yanaginuma and Mr. Masami Nishino.

Madame Nagwa's lessons were held once a week in a room at the Cairo center. I don't remember exactly when the first meeting was, but we began with "Iqd al Juman" by al'Ayni as our reading material. We used a copy I had made from the Suleymaniyeh Library in Istanbul. And we cross-referenced that with another copy from the Egyptian National Library's microfilm collection. Madame Nagwa kindly provided us with free copies of the National Library version. It was, however, not the best quality and difficult to read. So we gradually came to rely on the Suleymaniyeh version. When Madame Nagwa heard about this, she smiled with delight and said "you find that *hawaga* writing easy to read?" Madame Nagwa was using a derisive Egyptian word for foreigners in reference to a manuscript written in the Ottoman era. The Suleymaniyeh version was written in the 18th century, and the National Library version was written in the author's own hand in the 15th century. Back then, I wasn't concerned with such matters.

Although I always kept digital copies of both texts and my notes, Madame Nagwa recommended I keep hand-written copies as well. She mentioned this at first, but didn't comment on the matter again. When my computer was stolen, I lost some of my notes. I regretted not taking his advice, but it was too late.

The second half of my exchange student days in Egypt were focused on the "Madame Nagwa meetings". When I came back to Japan, I was happy to hear these meetings would continue. I once attended one of these "Madame Nagwa meetings" that was for junior researchers. I handed Madame Nagwa a recently published article of mine in English, expecting praise in response. She briefly said some nice things about my article and then turned to me and said, "Nobutaka-san, you're researching Egyptian history. You should write in Arabic." I remember being embarrassed not to have lived up to her expectations.

The Cairo Gender Studies Group

Junko Toriyama (Research Fellowship for Young Scientists, J. F. Oberlin University)

The Cairo Gender Studies Group was started in 2003, under Cairo center director Ms. Fumiko Hirano. The main members at that time were Ms. Emi Goto, Ms. Mio Chiyozaki, Ms. Junko Karasuyama, Ms. Hiroko Minezaki, and Ms. Asako Miyahara. These women were living in Cairo as foreign exchange students, administrative assistants, and spouses, and used the opportunity to exchange information about research and

daily life at the Cairo center. These meetings eventually became the Gender Studies Group. Some years earlier, the American University in Cairo had established the Institute for Gender and Women's Studies, (later renamed the Cynthia Nelson Institute for Gender and Women's Studies). Gender was widely recognized as a great new field in Middle Eastern studies. Outside the Cairo center, women were more often wearing veils and covering their bodies. We believed that gender studies was an effective and necessary tool to better understand the changes happening at that time.

We convened the study group once or twice in a week. They typically included research presentations and text readings (in Japanese, English, and Arabic). Next, we began work on a Japanese translation of "Remaking Women: Feminism and Modernity in the Middle East" (1998. L. Abu-Lughod ed. Princeton University Press) which we had already read in our study group under the direction of Prof. Haruo Kobayashi. Our Japanese translation was published in 2009 by Akashi Shoten (「女性をつくりかえる」という思想—中東におけるフェミニズムと近代性* See plate on page 27).

This study group was very important to my continued research, because we shared in common the experience of living in Cairo from the early to mid-2000s, and because we were able to discuss gender issues academically with researchers from our peer group. Words can only describe personal experiences so well. But by sharing our experiences, we could sympathize and be inspired by one another. We formed close bonds by speaking frankly and critically about our discoveries. My experiences with our gender studies group have become foundational to my research even now, both in the academic pursuits and human interactions.

2004 Bookshop Guide in Cairo Project

Takahiro Harayama (Toyo Bunko)

Time flies so quickly, and ten years or more have passed since we worked on the revised version of *Bookshop Guide in Cairo*.

In those days, we Japanese graduate students studying in Cairo often heard that some appreciable results of the activities of the JSPS Cairo Research Station were required. We were in debt to the research station at that time for its help. So we discussed what we could do for it, and then made this bookshop guide project one of the JSPS Cairo Research Station's activities which would succeed because of our efforts. At first, we thought this project was just visits to the bookshops whose names Kumiko Izumisawa noted in her article "Bookshop and Library Guide for Searching Books in Cairo". But the plan grew larger, and finally it was decided that we should collect information on all the bookshops in Cairo as far as possible. We might have put our feet in it with our decision to visit every bookshop door-to-door and get information from it. But cold drinks like *sobia* or *asab* were so delicious when we walked around the city in the summer researching bookstores. Editorial work like arranging information in order and editing maps increased my *shisha* smoking, but that is now a nostalgic memory. I think publishing and bookstores in Cairo have changed significantly, but I hope this guidebook still helps.

The Modern Middle East and Islamic World Field Studies Group
Daisuke Maruyama (Associate professor, National Defense Academy of Japan)

It was around mid-December of 2004 when I took a break from pursuing my master's degree to visit Cairo. With Mr. Kazuhiro Arai from Kyoto University Graduate School and Mr. Takenori Yoshimura from Waseda University Graduate School, we excitedly discussed being able to hold a study group for young researchers at the Cairo center.

We decided on the name "Modern Middle East and Islamic World Field Studies Group" (or "Field Studies Group" for short). As indicated by the long name, the group wasn't restricted to a particular field or subject of research. It brought together graduate students and young researchers for free discussion and exchange of opinions and information. I remember our founding members hoped that all researchers who visited Cairo would feel free to join us for earnest debates.

With the support and encouragement of Cairo center director Haruo Kobayashi (Tokyo Gakugei University) we managed to hold our first meeting on 14th January 2005. We only got together eight times in Cairo, but after returning to Japan the members found a new home for this group in Kyoto, where its activities continue to this day. Please refer to this web site, which also covers our time in Cairo.

(<https://sites.google.com/site/islamfield/>)

In January 2015, I visited the Cairo center again for the first time in ten years. My head was full of memories as I bowed to *bawab*, entered the dark entrance hall with the high ceiling, climbed the steps, and was warmly received as a visitor. When I looked toward the back room where we once held meetings, I remembered how little I knew about research back then, and wondered how I've managed to succeed these past ten years. I feel the Cairo center was probably the starting point of my research career.

The center taught me about the difficulty and importance of group study. I hope it will live on and prosper as a gathering place for researchers to exchange views. * See plates on page 106.

The Student Interaction Group
Asami Kataoka (Completed Master's degree in Waseda University)

I arrived in Egypt as a student in January 2009, tightly grasping my notebook with the address of the Cairo center written inside. A kind soul invited me into the quiet living quarters in a building in the Zamalek district of Cairo. The cold of a Cairene winter was the first nugget of knowledge I would come to understand only by living in Cairo and through my encounters at the Cairo center. The Student Interaction Group for Egyptian and Japanese students that was established through our interactions at the Cairo center lives on today as the Japan-Egypt Network Youth group in Cairo.

When I was assisting with the Cairo center's periodic lectures, I had the chance to speak with Egyptian students from the Japanese Language Department at Cairo University. It was a rare chance for

Japanese nationals studying Egypt and Egyptian nationals studying Japan to meet and interact. I thought this was a perfect chance for Egyptian and Japanese students to learn more about each other's countries. I wanted to create a place where I could help and hear the opinions of Egyptian students interested in Japan. With these goals in mind, I set out to establish a regular group meeting.

With the help of the Cairo center, we created the Student Interaction Group. The center's director Prof. Oishi kindly provided a place for our group meetings and space for our pamphlets at the reception area. Attendance varied at first, sometimes thirty or more people, other times only two or three. Over time, members started to propose activities and some Egyptian members helped manage the group. Meetings grew to include things besides research presentations, such as Egyptian music and Japanese martial arts. These interactions helped us better understand one another.

As membership increased, the Student Interaction Group meetings were relocated to the Japan Foundation in Cairo, and renamed the Japan-Egypt Network Youth group. Its activities continue today, with largely Egyptian student membership. Many current members may not realize the group was started a few Japanese students in Egypt. But I will never forget those early days of trial and error, just a few of us sorting out our activities in that room at the Cairo center.

I want to express my appreciation for the Cairo center, and my hope that it will continue to facilitate interactions between Japanese and Egyptian students and researchers, serving as a place for people to come together and learn from one another. * See plates on page 107.

3. Footprints: Memories of Mr. Suzuki and Studying in Egypt

‘Abd al-Raḥmān Noboru SUZUKI (Job: “Arabic Speaker”)

Manami Kondo (Associate Professor, Ryukoku University)

On the occasion of the 30th anniversary of the JSPS Cairo center, I also heard stories about Suzuki from people who used to visit the center, where he would take good care of them. But I'm glad that, even after his death, people associated with the center still remember his name. I'm sure there many people who knew him better than I, through their experiences with him and the center. Even now he's saying from his grave: “That's not so. You can't just write whatever you want.” So please forgive me.

He was a lively personality, but I remember him sitting crossed-legged behind a big desk quietly reading a book or using his computer. Behind him, books were stacked on shelves up to the ceiling. The walls in every room, and the hallways as well, were lined with shelves filled with books from his frequent bookshop visits. He also went to the International Book Fair every year. The director of the center and young researchers would gather at the center and take separate cars to the fair. Suzuki would make several trips to the book fair over the course of a few days. He took me there with him once. Booksellers from Egypt and abroad gather at this fair, so it's an amazing opportunity for a researcher. I remember how he helped

me out once when I had bought all the books I wanted, but had no idea how to carry them all. I've heard that group trips to the book fair have now become a tradition.

One thing he always said was that experiences are what matter. It seems he had had many good experiences in Egypt. One of those was surely going to the book fair with everyone. Another would have been the people and the knowledge he experienced at the JSPS regular lectures. I attended many of these meetings and remember seeing the fliers for those events on the door of his fridge. His philosophy seemed to be "live and let live", letting everyone say and do what they like. He himself also had many things to say, sometimes even during the open lectures. He had a loud voice, and that was an issue for some people, but I certainly don't think it was the whole story. On behalf of Suzuki, I would like to thank the JSPS center. I pray that the center will continue thriving as a place for positive experiences. * See plate on page 108.

Remembering My Days with Mr. Suzuki

Wakako Kumakura (Researcher, University of Tokyo)

Mr. Abdul-Rahman Suzuki Noboru is a recently deceased Japanese national who lived in Cairo for more than four decades. Having taken on an Arabic name, he worked as a journalist, the owner of a used bookshop, and sometimes as an Arabic language instructor at Japanese schools. So, he actually had many faces and took on many tasks. These allowed him to interact with people of different fields and different generations. Every visitor to Suzuki's home became a guest at a banquet.

There are a lot of people who knew Suzuki better than I, which makes writing about him here quite a challenge. Still, I welcome the chance to tell you about him as a way of repaying his many kindnesses toward me. So, I will start from my first encounter with Suzuki, when I was a Japanese student who had come to study in Cairo.

The first time I met Suzuki was in 2003, at the Cairo International Book Fair. I was in the first year of graduate school and it was my first time visiting Egypt alone. Although I had studied basic Arabic at university, I wasn't conversant in the language. I remember somehow managing to reach my destination anyway. But, I soon realized that I would have to locate history books among the countless volumes before me, and I had a very limited amount of time.

I then saw a Japanese-looking guy speaking fluent Arabic with an Egyptian. He was my beacon of hope amid a sea of Arabic. I approached him and asked "Are you Japanese?" and then continued "I can read Arabic but I can't speak it. Could you please ask that bookseller for me if he has the book I'm looking for?" He got slightly testy and replied "Are you asking people for favors without even introducing yourself first?" I never expected that turn of events. Surely, I was the one who should have been angry at his criticizing me without even giving me the chance to explain myself. He then walked away. That encounter, and my ire toward him, stayed with me for several days. Eventually, however, after a good amount of self-reflection, I realized he was right.

Just shortly before I was to return to Japan, I heard about the open lectures offered at the JSPS center, and attended one for the first time. When I went to the center, I figured the guy I had encountered at the bookseller's might be there. Sure enough, the minute he saw me there, he came over to me. I apologized for my rudeness the previous day, introduced myself all over again, and tried to explain what I was thinking at the time. The man's expression quickly became a friendly one, as he said, "My name is Suzuki." He started explaining why he raised his voice in anger. First of all, in Egypt you start by greeting someone, saying "Al-Salamu Alaykum (May peace be upon you)", you ask about their health, and then you ask if there's anything new with their family. Only after that brief conversation do you move on to the main point. So coming up to someone and asking them for a favor without greeting them or even introducing yourself is both rude and puzzling. Secondly, if you can actually read Arabic, you can also speak and write Arabic. So, if you're not applying that knowledge, it's doubtful whether you can really read Arabic at all. With no grounds for rebuttal, I had no choice but to concede. We shook hands in reconciliation, and I returned to Japan wiser for the experience. That was my first encounter with Mr. Suzuki.

Later, I was fortunate enough to study at Cairo University, living in Cairo from 2005 to 2007. Over those two years, I greeted new arrivals and saw off students who were returning to Japan. Mr. Suzuki was always there for such occasions. Suzuki would always invite students to his home for farewell parties the night before they left the country. There, he would display his cooking skills, preparing them luxurious feasts. One time, the main guest requested the cuisine of the Abbasid Caliphate in the Middle Ages. Suzuki found a book about the food of that time, and turned one of its recipes into an amazing meal.

But it wasn't just these special events. Students would gather at Suzuki's home every day, and talk with him into the night as he drank his trademark Old Parr scotch whisky. The walls at Suzuki's house were covered with bookshelves full of Arabic books on every topic from history to the problems of modern society. He was also quite dedicated to making scrapbooks of newspaper clippings. I remember looking through them as I listened to Suzuki talk about his problems.

I think every student stayed in contact with Suzuki, even after they finished their studies. There were seniors coming for short-term research who fell into the habit of drinking with him from day one. I, too, when visiting Egypt for research would say to him ever so selfishly, "Today let's have Chinese food." And like every other day, I would be treated to dinner at his home. Even in the intense heat of the summer, I would finish work at the archives and climb those dark stairs to his *shaqqa* apartment. As soon as I rang the doorbell, I would hear his cheerful voice, "Coming". I still vividly recall him standing in the kitchen saying: "It's so hot in here, but I can't help it," while cooking up the Chinese-style stir-fried vegetables I had requested. After eating, I would tell him about the discoveries I had made that day at the archives, and take in his comments over Stella Artois beer.

When I think about it, every time I look back on my research in Cairo, Suzuki comes to mind. And not just because of his words of encouragement or strong personality. He was the mediator of a network of students studying abroad, professors, and some people not doing any research. After he passed away, I was apprehensive about visiting a Cairo in which Suzuki was no longer a presence.

I think I didn't want to accept the fact that he was gone. And there many people who feel the same. But, I gradually overcame that feeling of loss and have since discussed my memories of him over *sake* and snacks. He still, to this day, connects all of us together in Cairo.

Memories of my Youth in Cairo
Yasushi Tonaga (Professor, Kyoto University)

I spent my late twenties in Cairo, from 1986 to 1988. Before coming to Egypt, I felt my research on Islam was stagnating. I had even thought about quitting. But after living in Cairo, and interacting with Egyptian people, their enthusiasm changed my outlook.

Actually living among those good people definitely taught me a lot about Islam and motivated me to continue my research.

At that time, there were a lot of students from Japan breathing in the air of Egypt. Including students from major universities like Mr. Iiuzuka, now a professor at the Tokyo University of Foreign Studies; Mr. Nakata, now a professor at Doshisha University; Mr. Akahori, now a Sophia University professor; and also Mr. Hasabe, now a professor at Keio University.

The monthly lectures at the JSPS Cairo center gave me a regular opportunity to meet with these future professors. The organizers of this club were Dr. Kazuo Otsuka and Dr. Hanada. It was so much fun to hear about the progress our friends had made in their research, and also to have a Japanese meal after finishing the discussion.

I usually spent summer in Istanbul, Turkey. It's been a very long time since I last visited Egypt. But honestly, Cairo is where I grew up and is my second home. That's why every time I visit Cairo, I feel young again.

See plates on page 111.

* Affiliation in Egypt at that time: Asian Studies Scholarship student of the Ministry of Education, Science and Culture of Japan

* Affiliation in Japan at that time: Doctoral student, Graduate School of Humanities the University of Tokyo

With 28 years of Gratitude for the JSPS Cairo Center
Masayuki Akahori (Professor, Sophia University)

It was difficult to get rice in Cairo, and basic infrastructure like water and electric was sub-standard. But my time there was mostly relaxed. There were many Japanese students in Egypt when I went there as a student. Mr. Yasushi Tonaga and Mr. Ko Nakata were already living there. Mr. Fumihiko Hasebe came later the same year, and Mr. Tetsuya Otoshi came the following year. Mr. Masato Iizuka served as a Special Researcher at the Japanese Embassy in Egypt. There were also many long-term resident Japanese archaeology students, like Mr. So Hasegawa. Tokyo University of Foreign Studies undergraduate students who wanted to study Arabic would also go to Egypt.

The Iraqi invasion of Kuwait began in 1990. There were many refugees from Kuwait in urban areas.

There were also some Japanese refugees from Jordan in Cairo at the end of that year. When the Gulf War began in January 1991, the Japanese Embassy warned Japanese nationals to leave the region. My study in Egypt was abruptly cut short, but was already longer than expected. I had been living there more than three years, after extending my original plan of two.

At that time, the JSPS Cairo center served as both the business office and the residence of the director. The director changed annually, sometimes bringing along their family, sometimes not. When I arrived in Cairo, the director was Prof. Otsuka. He made a point of coming out to meet me at the airport, which was quite pampering. He held a welcoming party for me that night. Although I was staying at a lodging only three minutes away from the Cairo center, I nevertheless somehow managed to get lost in the darkness. During my stay in Egypt, there were three different directors of the Cairo center, Prof. Nariaki Hanada, Prof. Shigeru Kamada, and Prof. Keiji Okazaki. As the base of my research work shifted from Cairo to Alexandria, I moved to far away Marsa Matruf in the villages of Egypt's Western Desert. I couldn't visit the center as often, but each time I did, the current director had made noticeable improvements to the center. Whenever I visited Egypt afterward, I would drop by the center at least once, and the current director would always take good care of me.

On the other hand, Sophia University then established their Cairo Research Center, borrowing space from the JSPS Cairo center. This was in response to the Japanese government's Reorganization and Rationalization Plan for Special Public Institutions, which called for the termination of the JSPS centers in Cairo and Nairobi. It is already in the past, but the JSPS Cairo center was in danger of being closed. The Japan Association for Middle East Studies cooperated with the JSPS, called on related organizations, and submitted a formal collective request to keep the center in Cairo. At the same time, the JSPS asked Sophia University to establish a center in Cairo to support the overseas activities of Japanese universities. The president of the collective at that time was Prof. Masatoshi Kisaichi and the secretariat was myself. Sophia University established their Cairo Research Center with the agreement of the collective, which is the arrangement at present. It is actually quite difficult for a single university to maintain a base of operations abroad, and it is quite unfortunate that the circumstances surrounding its establishment did not include the succession of the person in charge on the JSPS side. But, it is surely an important step toward the future growth of Sophia University.

I want to express my deepest appreciation to all the past directors of the JSPS Cairo center and now Sophia University's Cairo Research Center. I respectfully ask for the continuing cooperation of future directors.

* Affiliation in Egypt at that time: Asian Studies Scholarship student of the Ministry of Education, Science and Culture of Japan

* Affiliation in Japan at that time: Doctoral student, Graduate School of Sociology, the University of Toyo

The Flow of Time: Changing People and a Changing Cairo
Masato Iizuka (Professor, Tokyo University of Foreign Studies)

The two times I lived in Cairo (1988-1990 and 1995-1996), Egypt was basically at peace. When the Egyptian Army joined the multinational coalition in the Gulf War in early 1991, Egypt was rewarded with economic investment from the West. The shortages of goods that had sometimes occurred since the eighties quickly ended. The number of the restaurants serving Western cuisine increased dramatically. When I was appointed Special Advisor to the Japanese Embassy in Egypt in May 1988, Mr. Yasushi Tonaga, Mr. Ko Nakata, Mr. Masayuki Akahori, and Mr. Fumihiko Hasebe, all of whom had studied in Egypt, were my peers. And Mr. Tetsuya Otoshi joined us in 1989.

During my second stay in Cairo, from 1995 to 1996, Ms. Manami Kondo may have been the only Japanese graduate student in Cairo. But there was also Ms. Keiko Sakai, enrolled at the American University of Cairo, and Waseda University and the Middle Eastern Culture Center in Japan had ongoing excavation projects.

I first visited the Cairo center in January 1988. After first meeting director Kazuo Otsuka we stayed in close contact until his death. When I was appointed at the Embassy of Japan, at the suggestion of the late Prof. Tsugitaka Sato, I brought "*Retrospective and Prospective Views of Japanese Historians: West Asia and Africa 1949-85*", which had just been published in February of that year, as my gift to the Cairo center. Center Director Nariaki Hanada, however, got the mistaken impression it was a gift from Prof. Sato himself, not me. Director Shigeru Kamada was a former instructor of mine. He lived at the Cairo center in 1989, but I was quite busy with Embassy-related work and only saw him occasionally to bring him rare treats, like Japanese rice.

For my stay in Cairo from 1995 to 1996, on the other hand, I was a researcher with free time, and I visited the Cairo center once a month. Director Tadayoshi Kikuchi and Director Masatomo Kawamoto treated me to dinner, along with Mr. Noboru Suzuki, Ms. Manami Kondo, and Ms. Kumiko Hanada, who had graduated from the Tokyo University of Foreign Studies and was a Japanese instructor at the Japan Foundation at the time. We greatly enjoyed sharing our experiences with each other.

Time passes quickly. It has already been more than 20 years. Some people have passed away. I hope that the Cairo center will continue to be a place for Japanese researchers living in Egypt to share information and a place for interactions between Egyptians and Japanese forever.

* Affiliation in Egypt at that time: Embassy of Japan in the Arab Republic of Egypt • Special Advisor

* Affiliation in Japan at that time: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Research Associate

添付資料

海外研究連絡センター歴代派遣者一覧 People Stationed at JSPS Centers in Tehran and Ankara

● 西アジア地域研究センター（1965年設置）The Japanese Institute of West Asian Studies (from 1965)

氏名	派遣期間		所属	
大野 盛雄	Morio Ohno	1966.3.16-1966.12.4	Tehran	東大・東文研・教授
小谷 仲男	Nakao Odani	1966.8.10-1967.2.27	Tehran	京大・文・教務員
山田 稔	Minoru Yamada	1967.12.15-1968.3.31	Tehran	東外大・文・大学院生
石井 昭	Akira Ishii	1967.12.15-1968.4.30	Tehran	都立大・工・助教授
本田 実信	Minobu Honda	1968.4.12-1969.4.18	Tehran	北大・文・教授
縄田 鉄男	Tetsuo Nawata	1969.4.1-1970.3.31	Tehran	島根大・文理・講師
佐藤 圭四郎	Keishiro Sato	1970.4.29-1970.8.17	Tehran	東北大・文・教授
黒柳 恒男	Tsuneo Kuroyanagi	1971.1.20-1971.4.30	Tehran	東外大・教授
井本 英一	Eiichi Imoto	1971.4.20-1972.4.10	Tehran	阪外大・教授
末尾 至行	Yoshiyuki Sueo	1972.4.5-1973.2.22	Tehran	関西大・文・教授
相馬 隆	Takashi Soma	1973.4.1-1974.3.31	Tehran	国博・技官
石井 昭	Akira Ishii	1974.4.5-1975.4.4	Tehran	都立大・工・助教授
羽田 亨一	Koichi Haneda	1975.11.15-1976.4.30	Tehran	東外大・AA研・助手
古里 節夫	Setsuo Furusato	1975.4.1-1975.9.30	Tehran	東教大・文・教務補佐員
池田 次郎	Jiro Ikeda	1975.5.7-1976.3.31	Tehran	京大・理・教授
加藤 和秀	Kazuhide Kato	1976.4.15-1977.3.31	Tehran	東海大・文・助教授
本田 実信	Minobu Honda	1976.7.1-1976.12.31	Tehran	京大・文・教授
後藤 晃	Akira Goto	1977.3.23-1978.3.31	Tehran	東大・東文研・助手
縄田 鉄男	Tetsuo Nawata	1977.6.28-1977.9.22	Tehran	熊本大・法文・助教授
大野 盛雄	Morio Ohno	1978.5.1-1980.3.31	Tehran	東大・東文研・教授
村田 さち子	Sachiko Murata	1978.3.22-1979.12.19	Tehran	学振奨励研究員
上岡 弘二	Koji Kamioka	1980.3.17-1980.7.9	Tehran	東外大・AA研・助教授
		1980.8.20-1980.10.15		
		1981.3.25-1981.5.24		
梅村 坦	Hiroshi Umemura	1982.1.31-1982.5.8	Ankara	東洋文庫・ユネスコ東アジア文化 研究センター・研究員
護 雅夫	Masao Mori	1982.3.2-1982.5.28	Ankara	日大・文理・教授
小松 久男	Hisao Komatsu	1982.4.24-1983.3.27	Ankara	東海大・文・講師
堀川 徹	Toru Horikawa	1983.3.21-1984.3.20	Ankara	京外大・講師
山内 昌之	Masayuki Yamauchi	1984.3.24-1985.3.23	Ankara	東大・教養・助教授
小山 皓一郎	Koichiro Koyama	1985.3.14-1986.3.13	Ankara	北大・文・助教授
林 俊雄	Toshio Hayashi	1986.3.4-1986.9.16	Ankara	古オリエント博・主任研究員

●カイロ（1984年度設置）People Stationed JSPS Cairo Research Station (from 1984)

氏名	派遣期間	前職
佐藤 次高 Tsugitaka Sato	1984.8.18-1984.12.4	東大文 助教授
後藤 明 Akira Goto	1985.9.2-1986.1.15	山形大人文 助教授
藤田 進 Susumu Fujita	1986.4.1-1987.3.31	東外大外 助教授
大塚 和夫 Kazuo Otsuka	1987.4.20-1988.4.2	民博 助手
花田 宇秋 Nariaki Hanada	1988.3.25-1989.4.3	明学大一般 助教授
鎌田 繁 Shigeru Kamada	1989.3.25-1990.3.31	東大東洋文化研 助教授
岡崎 桂二 Keiji Okazaki	1990.3.25-1991.3.24	四天王寺大学 専任講師
清水 宏祐 Kosuke Shimizu	1991.4.10-1992.4.9	東外大外 助教授
竹下 政孝 Masataka Takeshita	1992.3.28-1993.4.6	東大文 助教授
加藤 博 Hiroshi Kato	1993.4.1-1994.4.3	一橋大経済 教授
山田 幸正 Yukimasa Yamada	1994.3.29-1995.4.1	都立大工 助手
菊池 忠純 Tadayoshi Kikuchi	1995.3.26-1996.4.2	四天仏大文 助教授
川本 正知 Masatomo Kawamoto	1996.3.25-1997.4.10	奈良産業大学経済 助教授
中田 考 Ko Nakata	1997.4.1-1998.3.31	山口大教育 助教授
長澤 榮治 Eiji Nagasawa	1998.3.27-1999.4.3	東京大学東洋文化研究所 助教授
大稔 哲也 Tetsuya Otonari	1999.4.1-2000.3.31	九州大学文学部 助教授
辻村 純代 Sumiyo Tsujimura	2000.4.1-2001.3.31	国士舘大学イラク古代文化研究所 共同研究員
保坂 修司 Syuji Hosaka	2001.4.1-2002.3.31	財団法人東洋文庫 研究員
田中 哲也 Tetsuya Tanaka	2002.4.1-2003.3.31	福岡県立大学 人間社会学部 教授
平井 文子 Fumiko Hirai	2003.4.1-2004.3.31	獨協大学経済学部 講師
小林 春夫 Haruo Kobayashi	2004.4.1-2005.9.30	東京学芸大学 教育学部 教授
坂井 定雄 Sadao Sakai	2005.10.1-2008.4.20	龍谷大学 名誉教授
大石 悠二 Yuji Oishi	2008.4.21-2011.3.31	江戸川大学 教授
長谷川 奏 So Hasegawa	2011.4.1-2015.3.31	早稲田大学総合研究機構 客員准教授
深見 奈緒子 Naoko Fukami	2015.4.1-	早稲田大学イスラーム地域研究機構 招聘研究員

カイロセンターでの講演会ほかイベント

資料が見つからず、不明のままとなっている年もありますが、1987年から2015年12月までに開催されたものをまとめています。なお、開催場所に関しては、1987年から1994年1月まではカイロ日本人会会議室、その後は現在のカイロセンター1階事務所にて開催されています。なお、2001年8月27日の懇話会はアフラム新聞社との共同開催でアフラム新聞社内イブラーヒム・ナーフィア・ホールにて、2011年8月28日と2012年8月11日の音楽コンサートはBeit el-Umma (Saad Zaghoul Culture Center)で行われました。また、1997年の4回は国際交流基金との共催でした。名称に関しては1987年～1991年までは研究会、1993年はカイロ談話会、1997年は学術講演会、1998年から懇話会の名称となりました。2010年から開催され始めた現代中東研究会には*をつけてあります。

日時	題目	発表者等	
1987/10/31	人類学的イスラーム研究の最近の動向	大塚和夫(センター長)	大塚
1987/11/21	アブド・アル・ジャッバルの倫理思想を巡って	塩尻和子	
1987/12/	イブン・タイミーヤ	中田孝	
1988/01/16	エジプトの工業化の現状について	鈴木弘明(アジア経済研究所)	
1988/02/27	イスラーム神秘主義の思想的理解のための覚書	東長靖	
1988/03/19	ヤヒヤ・ハッキーの「オンム・ハーシムの吊りランプ」について	高井清仁	花田
1988/06/11	イスラームとダンテと三木論文と	花田宇秋(センター長)	
1988/07/08	中東の遊牧民における平行イトコ婚	赤堀雅幸(東京大学大学院)	
1988/12/17	マムルーク朝時代の民衆・商人・公権力	長谷部史彦(慶応義塾大学大学院)	
1989/01/21	ムハンマド・アブドゥフの政治思想	飯塚正人(在エジプト日本大使館専門調査員)	
1989/06/02	スンナ派法学のカリフ論	中田孝(カイロ大学文学部哲学科博士課程)	鎌田
1989/07/29	エジプトの民主化と地方自治	伊能武次(アジア経済研究所)	
1989/11/18	シーア派・イマームについて	鎌田繁(センター長)	
1989/12/23	国際石油情勢と中東の行方	畑中美樹(中東経済研究所)	
1990/01/27	エジプトにおける政治的諸勢力の現状	飯塚正人(在エジプト日本大使館)	
1990/02/24	ローマ・ビザンツ支配期エジプトの土器文化	長谷川奏(早稲田大学大学院博士課程)	岡崎
1990/03/24	マスル・アディーマ生活誌	大稔哲也(東大大学院博士課程)	
1990/09/22	エジプトの女性問題	泉沢久美子(アジア経済研究所)	
1990/11/17	湾岸危機とエジプト情勢	白井正博(在エジプト日本国大使館専門調査員)	
1990/12/15	アラブ古典詩について	岡崎桂二(センター長)	
1991/01/19	シナイ半島の言語調査から	西尾哲夫(東外大アジアアフリカ言語文化研究所)	加藤
1991/02/14	イブン・タイミーヤの政治理論	中田孝(カイロ大学哲学科)	
1993/05/27	エジプトの農民と遊牧民	加藤博(センター長)	
1993/06/24	15・16世紀の東地中海世界	堀井優(東京大学大学院・カイロ大留学生)	
1993/09/23	エジプト映画事情(仮題)	高野晶弘(東京外国語大学)	
1993/10/26	エジプトの灌漑システム—過去・現在・未来	長澤栄治(アジア経済研究所)	中田
1993/12/18	エジプトの視点からみた中東和平と原理主義	松本太(日本大使館)	
1993/12/25	イスラーム復讐の歴史人類学	大塚和夫(東京都立大)	
1994/01/27	砂漠に消えた「革命」—近代エジプトの遊牧民「革命」	加藤博(センター長)	
1997/07/28	イスラーム主義とエジプト 中東の民主化	中田孝 田原拓治(中日新聞)	
1997/09/21	エジプト人ムスリムの結婚	奥野克己(京都文教大学)	長澤
1997/11/04	エジプト民衆のイスラーム	大塚和夫(都立大学)	
1998/06/15	事務所開き	長澤栄治(東京大学東洋文化研究所)	
1998/07/05	アラブと東アフリカ—インド洋交渉とスワヒリ世界の形成史	福田安志(アジア経済研究所)	
1998/08/03	アラブ世界への人類学的アプローチ	大塚和夫(都立大学)	
1998/08/30	原理主義とイスラーム	飯塚正人(東外大アジアアフリカ言語文化研究所)	

1998/09/30	曲がり角のエジプト経済	野口勝明(日本貿易振興会カイロ事務所長)	長澤	
1998/10/31	人口と移動から見た下エジプトと上エジプト	店田廣文(早稲田大学人間科学部教授)		
1998/11/28	エジプト映画と私	高野晶弘(翻訳家)		
1998/12/03	日本の文明戦略にとっての中東	板垣雄三(東京経済大学教授)		
1998/12/19	年末特例会 中東関連文献紹介(入門編)	福田幸正(海外経済協力基金)		
1999/01/30	現代エジプトの医療制度状況	荻原理江(国際協力事業団)		
1999/02/25	アラブ諸国の民主化問題を考える—最近の市民社会論を中心に	私市正氏(上智大学アジア文化研究所)	大稔	
1999/03/27	アラブ主義の現在	長澤榮治(センター長)		
1999/05/29	19世紀のエジプトと日本における啓蒙思想：福沢諭吉とタフターウィーの比較研究	Rauf Abbas Hamid(カイロ大学文学部副部長・教授)		
1999/06/26	現代エジプト小説と都市空間(ナギーブ・マハフーズのカイロ)	福田義昭(大阪外語大学大学院博士課程)		
	エジプトの NGO と草の根の活動家	平貴仁(元 Takarai)		
1999/08/28	中世カイロとカラコルム(モンゴル)を結ぶもの：14～15世紀のワクフ(寄進財)と歴史家	菊池忠純(四天王寺仏教大学助教授)		
1999/09/18	聖イブラヒーム伝説：イスラーム世界から東南アジアへの拡大	佐藤次高(東京大学教授)		
1999/10/23	1990年代後半シリアにおける反政府勢力の動向—シリア共産党・政治局を中心に	青山弘之(アジア経済研究所)		
1999/12/25	ナイルの水、カイロの水—現代エジプトの直面する水問題	小林三樹(北海道大学大学院助教授, JICA 派遣専門員)		
2000/03/25	カイロの墓地居住者：社会的観点から(アラビア語・日本語通訳つき)	マフムード・アル・クルディー(カイロ大学教授・社会学科長)		
	中世カイロ死者の街、参詣の華やぎ	大稔哲也(センター長)		
2000/06/01	コプト芸術とそのシンボリズムについて	ガマル・ヘルミーナ(コプト博物館学芸員)		辻村
2000/06/29	パピルス古文書からみたイスラーム文化	サイード・マガウリ(国立図書館アラビア語パピルス研究責任者)		
	アフガニスタンにおける文化遺産の破壊と保護活動	後藤健(東京国立博物館西アジア・エジプト室長)		
2000/08/03	エジプトにおける ODA の現状報告	中村三樹男(国際協力事業団エジプト事務所長)		
2000/09/28	カイロに現存するワカーラ、都市型隊商施設の建築史的考察	山田幸正(都立大学大学院工学研究科)		
2000/11/24	経済統制下のイラクの現状	酒井啓子(アジア経済研究所)		
2001/01/25	コプト博物館とコプト文化	マヘル・サリーブ(コプト博物館長)		
	アラビア語文献から見たパレスティナ	サイード・マガウリ(国立図書館アラビア語パピルス研究主任)		
2001/02/23	中エジプトの考古遺跡	ワグディ・ラマダン(ミニア大学教授)		
	ツタンカーメンとその時代	河合 望(ジョンズホプキンス大)		
2001/03/27	中部エジプトの遺跡と宗教	辻村純代(センター長)		
2001/07/12	アラビア語パピルス文書における書道と書法	サイード・マガウリ(国立図書館アラビア語パピルス研究責任者)	保坂	
2001/08/27	エジプトと日本との出会い—その文明論的意味	板垣雄三(東京大学名誉教授)		
2001/11/08	現代エジプト政治情勢とイスラーム武装組織の系譜	鈴木恵美(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究選考博士課程)		
2002/01/31	スルターン・カーイト・バーイのワクフワクフ省における文書調査に基づいて	松田俊道(中央大学助教授)		
	聖カテリーナ修道院とシナイ半島の歴史的な文書	サイード・マガウリ(エジプト国立図書館)		
2014/03/14	現代アラブ思想の展開	池内恵(アジア経済研究所)		
2002/03/28	イスラームとテロリズム—9月11日事件をめぐって	保坂修司(センター長)		
2002/08/29	近年における日本のイスラム世界研究事情	加藤博(一橋大学教授, 日本中東学会会長)		
2002/10/24	エジプト教育の現状	イサム・ハムザ(カイロ大学准教授, 教育大臣特別顧問)		
2002/12/26	中近東の結核と保健の状況	清田明宏(WHO 中東地中海地域事務局結核対策医務官)		田中
2003/02/27	現代アラブ・イスラーム研究と現代イスラエル・ユダヤ研究の架橋は可能か?	白杵陽(国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授)		
2002/03/19	ムスリムとして生きる：南エジプトのフィールドワークから	奥野克己(京都文教大学助教授)		

2003/06/18	バハレイヤ・オアシスにおける社会開発プロジェクトに見る女性の自立	大崎由加里(青年海外協力隊,洋裁講師)	平井
	コンピュータ技術支援活動を通して見た現代エジプト人気質	小澤奈津子(青年海外協力隊,システムエンジニア)	
2003/08/20	エジプトにおける児童労働問題と児童教育について—”アル・ジール・センター”の活動を通じて	アフメド・アブドゥッラー(アル・ジール・センター所長)	小林
2003/10/02	アラビア語パピルスに見る結婚,離婚・ホッラー(離別)について	サイード・マガウリ(エジプト国立図書館アラビア語パピルス研究主任)	
	現代エジプトの家族法/身分法をめぐる諸問題	嶺崎寛子(お茶の水女子大学大学院・JICA 在外専門調整員)	
2003/12/11	「ブルカ」三つの謎—その名前,かたち,理由	後藤絵美(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究博士課程,カイロ・アメリカン大学留学中)	小林
2004/01/08	イラク戦争後のアラブ世界	長澤栄治(東京大学東洋文化研究所教授)	
2004/03/07	サハラ・キャラバン交易とアラブ世界—アラブがみた黒人アフリカ社会	私市正年(上智大学教授)	小林
2004/05/12	文明としてのイスラーム—思想の歴史	小林春夫(センター長)	
2004/07/08	パピルス文書にみる薬草と香草	サイード・マガウリ(メヌフェーヤ大学助教授)	小林
2004/09/02	イスラームと経済—理論と現実	加藤 博(一橋大学教授)	
2004/11/25	アラビア文字の美	アシュラフ・オベイド(エジプト外務省)	小林
2005/01/27	エジプトにおける遺伝子組み換え食品	ハニー・エルシェミー(カイロ大学助教授)	
2005/05/26	源氏物語とアラブ文学	アフマド・ファトヒ(カイロ大学日本語学科助教授)	小林
2005/07/28	古文書に見る奴隷制度	サイード・マガウリ(メヌフェーヤ大学助教授)	
2005/08/25	統計からみた現代エジプト社会	加藤博(一橋大学大学院教授) 岩崎えり奈(一橋大学)	小林
2005/11/24	イラクの連邦制について	坂井定雄(センター長)	
2006/01/26	フィリピン南部ムスリム社会の現状	石井正子(国立民族学博物館助手)	小林
2006/03/20	ナスィール・シャンマの深奥	ナスィール・シャンマ(世界的ウード奏者)	
2006/03/23	政教分離(世俗主義の理念と現実)	島菌進(東京大学教授)	小林
2006/08/05	乳科学者から見るエジプト Egypt, Seen from a Dairy Scientist -Ancient Egypt Which Influenced People and Land. Women and New Research in Food-	Mervat Foda(National Research Center 部長)	
2006/07/06	イスラーム・パピルス文書の芸術—女性や動物などを描いた絵画とカリグラフィー	Said Moghawery Mohammed(Munufia 大学観光学部助教授)	小林
2006/08/26	「9.11」以降のパレスチナ・イスラエル紛争を考える—中東の危機はなぜここまで深まったか,これからどうなるのか—	白杵陽(日本女子大教授)	
2006/08/12	アコリス遺跡発掘調査見学会	川西宏幸(筑波大教授)	坂井
2006/9/9.10	E L - T O R 遺跡発掘調査見学会	川床睦夫(発掘調査隊長)	
2006/11/30	エジプトのスーフィー(イスラーム神秘主義)教団—この国の宗教,社会と政治を理解する鍵—	Ali Al-Mekkawi(カイロ大学文学部社会学科長・教授)	坂井
2007/05/09	エジプト,グローバル化と社会変動—経済発展・開放政策の行方—	Khalil Darwish(カイロ大学政経学部・行政学科長・教授)	
2007/07/11	日本・エジプト関係の再評価	Isam Hamza(カイロ大学教授)	坂井
2007/08/30	「イスラーム世界」はあるのか	加藤博(一橋大学大学院教授)	
2007/11/29	エジプトの野生植物から新抗がん薬も—新薬開発で注目の生化学最前線—	Hany A. El-Shemy(カイロ大学教授)	坂井
2008/01/24	化粧から見る現代カイロの女性たち	鳥山純子(学振特別研究員)	
2008/02/28	地域に根ざした障害者支援	吉田美穂(J I C A 専門家)	坂井
2008/05/22	コミュニケーションと政治改革	アムル・エルレイシー(週刊エル・ハーミス紙主筆)	
2008/07/31	放置地雷の探査と除去	ガッド エルカディ(エジプト国立天文・地球物理学研究所)	大石
2008/08/19	砂糖から見たイスラーム社会	佐藤次高(早稲田大学大学院教授)	
2008/10/30	古文書に見るエジプトの結婚と離婚	サイード・マガウエリ・モハメッド(ミヌフィア大学准教授)	大石
2009/01/29	エジプトの近代化と明治維新	イサム・ハムザ(カイロ大学文学部日本語・日本文学科教授)	
2009/02/19	25年ぶりのエジプトで何を見たか	中島輝明(カイロ日本人会会長,三井物産カイロ事務所)	大石

		長)	
2009/06/11	エジプトと日本	黒田壽郎(アインシャムス大学客員教授)	大石
2009/07/30	新大エジプト博物館のすべて	中村三樹男氏(新エジプト大博物館保存修復センターチーフアドバイザー)	
2009/10/29	エジプトの石油天然ガス事情“四方山話”	田沢章弘(エジプト石油開発(株)カイロ代表)	
2010/03/18	カイロ・死者の街—その過去と現在—	大松哲也(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)	
2010/05/27	『明六雑誌』の刊行された時代	アラール・アリー・ゼイン・エルアーベディン氏 (カイロ大学文学部日本語・日本文学科准教授)	
2010/07/29	イスラムを報道すること	川上泰徳氏 (朝日新聞論説委員兼編集委員・ASAHI 中東マガジン編集人(中東駐在))	
2010/09/09	もうひとつの古代エジプト-アコリス遺跡を掘り続けて30年	川西宏幸氏 (筑波大学大学院教授)	
2010/10/21	*西アジアと北アフリカにおける政治意識の覚醒	富田広士氏(慶応義塾大学法学部教授)	
2010/11/04	エジプトの水と灌漑農業	北村浩二氏(独立行政法人国際協力機構(JICA)派遣専門家,エジプト政府水資源灌漑省農業・水資源政策アドバイザー)	
2011/02/17	ピラミッドを築いた人々	河江肖利氏(古代エジプト調査協会エリア・マネージャー)	
2011/03/17	*エジプト「革命」前後における経済動向について	高宮純一氏(日本貿易振興機構カイロセンター所長)	
2011/05/22	船頭二人で船沈む?! エジプト・アーンミーヤの諺	竹村和朗 (東京大学大学院博士課程)	
2011/06/23	新しいデルタ考古学の始まり—水辺環境をめぐるヘレニズム文明の知を求めて—	長谷川奏(センター長)	
2011/08/11	*パキスタン・アフガニスタンの取材体験記	太 勇次郎(NHK カイロ支局長)	
2011/08/28	夏季特別イベント(音楽コンサート)アラブ音楽のタバージャスミンの国からの贈りもの—	ル・クラブ・バシュラフ(Le Club Bachraf)	
2011/09/29	自発的なヴェール着用をどう読むか—芸能人女性の「語り」からの一考察—	後藤絵美(日本学術振興会特別研究員 PD)	
2011/11/17	ヴァイオリンで聴くアラブの音	木村伸子(早稲田大学文学研究科後期博士課程)	
2011/12/15	*最近のエジプト情勢と日エジプト関係	柘瀨 正巳(在エジプト日本国大使館 公使)	
2012/01/19	新カイロ物語—ノスタルジアとカイロ旅物語:『スルターンのトゥグラの書』から—	松田俊道(中央大学文学部教授)	
2012/02/16	*ザマーレク横丁商店街の光と影—『朝日中東マガジン』の連載から—	鈴木登(鈴古堂店主)	
2012/03/14	「アラブの春」を起点とするエジプトと日本の国際交流の未来	イサム・ハムザ(カイロ大学文学部教授)	
2012/05/31	『百一夜物語』—シャハラザードを超えて—	鷲見朗子(京都ノートルダム女子大学教授)	
2012/06/21	エジプトにおける国語と文学教育—「エジプト人」の作られ方—	平寛多朗(東京外国語大学大学院博士課程)	
2012/07/12	*「牛の腹」に住む人々—スラム住民の生活にみるエジプト最貧困層の実態—	飯山陽(フジテレビカイロ支局員/上智大学アジア文化研究所客員所員)	
2012/08/11	夏季特別イベント1(音楽コンサート)アラブ音楽のタバ—よるこびの息吹—	ル・クラブ・バシュラフ(Le Club Bachraf)	
2012/9/9-20	特別イベント(展覧会)アラビア書道小作品展「アラビア文字に魅せられて」 Magdy Helyl 他		
2012/09/12	夏季特別イベント2(講演会)宇宙からみたエジプト遺跡	恵多谷雅弘(東海大学情報技術センター研究員)	
2012/10/18	考古遺跡から社会へ—文化遺産の保存への新たな取り組み—	伏屋智美(遺跡保存コンサルタント)	
2012/11/15	エジプト人学生からみた日本—比較研究の視点から—	野田有紀子(アインシャムス大学外国語学部日本語学科客員講師)	
2012/12/20	*同胞団ウォッチの面白さ	大内清(産経新聞中東支局長)	
2013/01/17	世界の船の遺物とクフ王の船	黒河内宏昌(NPO 法人太陽の船復原研究所教授・クフ王第2の船発掘現場主任)	
2013/02/28	中世エジプトのナイル灌漑—灌漑土手はどこへいったのか?—	熊倉和歌子(日本学術振興会特別研究員 PD)	
2013/03/14	ジュニア研究発表会 近代史研究における古写真・絵葉書の活用—学習院大学史料館の取り組みを中心に—	長谷川怜(学習院大学大学院博士後期課程)	
2013/03/28	*中央アジアのイスラム国「ウズベキスタン」—知られざる親日国の素顔とその葛藤—	高橋正和(国際交流基金カイロ日本文化センター所長)	

大石

長谷川

2013/04/24	*イスラム過激派の潮流と展望ーパレスチナ自爆未遂犯やシリア内戦から探るー	池滝和秀(時事通信社カイロ特派員)	長谷川
2013/06/06	初期ムスリム同胞団の思想と活動ー創設者ハサン・バンナーの著作を通じてー	福永浩一(上智大学大学院博士課程,ヘルワン大学文学部歴史学科)	
2013/07/18	「1.25 革命」後の女性支援活動の変遷ー時代に翻弄されるエジプトのジェンダー問題ー	片岡麻美(在エジプト日本大使館専門調査員)	
2013/11/21	*エジプトでの味の素の販売活動	宇治弘晃(エジプト味の素食品社)	
2013/12/19	Recent work at the 'Temple of Millions of Years' of king Amenhotep II	Dr. Hourig Sourouzian (Director of 'The Colossi of Memnon and Amenhotep III Temple Conservation Project')	
2013/12/18-26	特別イベント(展覧会)記憶に刻む風景ー若手美術家(陶芸・写真)小作品展ー	若手美術家(JICA 美術隊員) : 池田昌司(陶芸),湯浅ちひろ(写真)	
2014/01/30	イスラムにおける神の名前ータンヌーラからイスラム哲学まで	澤井真(東北大学大学院博士課程)	
2014/02/20	*パレスチナ問題 : 「アラブの春」の風を受けて	山本英昭(在エジプト大使館広報文化センター所長/前職 : 対パレスチナ自治政府・日本政府副代表)	
2014/03/20	特別企画「トルコ～エジプト～日本をつなぐ近代社会のネットワーク」 :		
	1) 日本出身タタル移民のライフヒストリーートルコ・アメリカへの移住を中心に	沼田彩誉子(ボアジチ大学アジア学研究所客員研究員)	
	2) スフィンクスと奈良の大仏ー明治日本の建築家,伊東忠太の埃及(エジプト)旅行ー	青木美由紀(イスタンブール工科大学准教授補)	
2014/3/20-30	特別イベント(展覧会)アラビア書道小作品展 2014「アラビア文字に魅せられて」 Magdy Helyl 他		
2014/05/29	The Development of Pyramids from Djoser in Sakkara to Snofru at Dahshur	Prof. Dr. Rainer Stadelmann (Former Director of the German Institute of Archaeology in Cairo)	
2014/06/26	不倫は死刑か懲役刑か?ーファトワー(イスラム法的見解)にみる“イスラム的生き方”の多様性ー	飯山陽(フジテレビカイロ支局員/上智大学アジア文化研究所客員所員)	
2014/7/20-8/14	特別イベント(展覧会)小展示会「速報・ルクソールにおける貴族墓の新発見」		
2014/08/28	*イランー異端の中東大国ー	長谷川健司(共同通信カイロ支局長,元テヘラン,エルサレム支局長)	
2014/09/25	*アフリカの自衛隊を追い掛けて	小林基秀 (北海道新聞カイロ支局長)	
2014/10/16	*エジプト駐在の4年半を回想する	高宮純一(JETRO カイロ事務所所長)	
2014/11/20	エジプトの文化遺産ー持続可能な文化遺産保全の観点からー	星野有希枝(在エジプト日本大使館一等書記官)	
2014/12/18	*エジプトにおける公的セクターの計画実施能力の課題	松永秀樹(JICA エジプト・イエメン事務所長)	
2015/02/26	イスラム式保険(タカフル)の概念,仕組み,および将来性,課題	市原大和(Tokio Marine Egypt General Takaful S.A.E./Chief Operating Officer)	
2015/3/4-20	特別イベント(展覧会)アラビア書道小作品展 2015「アラビア文字に魅せられて」 Magdy Helyl 他		
2015/03/20	エジプト文化財保存史の新たな構築をめざして	長谷川奏(センター長)	
2015/05/21	古代エジプトの聖なる丘を掘るー早稲田大学によるアブ・シール南丘陵遺跡の調査ー	河合 望 (早稲田大学高等研究所准教授)	
2015/06/04	文化遺産の国際協力ー大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト	原田怜(JICA 長期専門家・金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学センター客員研究員)	
2015/07/30	*地域研究と映画 : 映画を通して歴史・社会・文化を見つめる	エルサムニー ソフィー(在エジプト日本国大使館専門調査員)	
2015/09/03	エジプト近代教育史 : 現在の教育問題の理解のために	田中哲也(福岡県立大学教授)	
2015/10/18	古代エジプトの壁画の保存修復ー過去から未来へ何をどう残すかー	西坂朗子(東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授,早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員)	
2015/12/03	*エジプトでのシリア難民支援 1 年半を振り返る : UNHCR 資金支援プログラムを通して見る難民支援ーシリア難民のケースから	久保山 敬太(国連高等弁務官事務所(UNHCR)エジプト事務所シリア難民向け資金支援プログラム 主任担当官)	
2015/12/19	特別懇話会 関節軟骨再生と広島大学	越智 光夫(広島大学学長)	

長谷川

深見

あとがき Afterword

カイロセンター設立 30 周年という重要な任務を前任の長谷川センター長から承ったのは、2015 年 3 月 3 日のメールでした。「30 周年事業は先延ばしになりました。おそらく 11 月くらいでしょう。新センター長の大仕事となります。どうぞ宜しく。」と。長谷川さんによって、講演会等のお膳立てはすでになされていたので、本部、アルムナイ、大使館、事務所内の協力によって、不備な点等もあったと思いますが、どうか開催にこぎつけると思います。

ところで、科研費等でお世話になったことのある学振でしたが、海外での広報運営活動は、イスラーム建築史研究者としての私には、高いハードルがございました。しかしながら、せっかく中東のカイロのセンターに駐在し、三十周年にあたって何ができるのかということを考えました。2014 年末にカイロを訪れた際、長谷川さんからいただいたセンター長一覧には、常々お世話になっている先生方のお名前が並んでいました。また、加藤部長からテヘランからアンカラ、そしてカイロへと半世紀にわたる歴史をもつことを伺いました。カイロにおける 30 年の足跡と、さらにはその前身について、なんらかまとめることはできないだろうかと思いを立ちました。

もう少し早く発案していればよかったのですが、夏のデリー調査や、秋の日本やアブダビでの研究発表に翻弄され、結局原稿を元カイロセンター長の先生方に依頼させていただいたのは、11 月に入ってからになりました。さらに、その後本部でまとめていただいた「海外研究連絡センター歴代派遣者一覧」に基づき、テヘランやアンカラ関係の先生方、そして関係諸氏にお声がけしたのは、12 月という失態でした。にもかかわらず、多くのみなさまからお原稿や写真をいただけましたこと感謝しております。すでに亡くなられた元センター長のために若いお弟子さんたちから原稿をいただき、メールをお使いにならない先生方とのやりとりは、早稲田大学イスラーム地域研究機構の吉村さん、亀谷さん、杉村さんのお力をお借りいたしました。

中表紙と裏表紙には、花田先生直筆のエジプトを描いた絵はがきを使わせていただきました。中表紙は「ムハンマド・アリー・モスクと市場」、裏表紙は「綿摘み風景」と題されております。「エジプトに関わる日本学術振興会の主な事業」、「講演会ほかイベントおよび出版物」、「センターに関わる覚え書き」の「カイロセンター内でおこなわれた研究会」に関しましては、助手の坂東さんが原稿をまとめました。なお、添付資料に関しては「海外研究連絡センター歴代派遣者一覧」は本部よりのデータ、「カイロセンターでの講演会ほかイベント」は助手の坂東さんがデータを収集しました。

可能ならば、日本語、英語、アラビア語の 3ヶ国語でと思ったのですが、限られた時間の中で、アラビア語訳は一部だけ、しかも抄訳となってしまいましたこと、お詫びいたします。なお、英訳にあたっては、アインシャムス大学日本語学科卒業生のハーガルさんとマハさん、坂東さんおよび私が訳したものを、マイケルさんと早稲田のジェフさんにチェックしてもらいました。また、アラビア語訳に関しては、助手のサブリーンさん、および先のマハさんが訳し、シャウキーさん(ヌーン・センター所長)に校正をお願いしました。

本冊子をまとめてみて、ここ 50 年の歴史の中で、紆余曲折を経ながらも、大きくは西アジア地域研究センターが持続することで、中東と日本が、研究を通して結ばれていったことがわかります。本来でしたら、すべての関係者からの原稿を収録し、3ヶ国語で作成することが望まれます。いつの日にか、この冊子の改訂版としてそのような書籍をカラーで印刷できますことを期待します。そして、このセンターが末長く持続することを祈念いたします。

I learned that I would be assigned the important mission of organizing the 30th anniversary celebration for the JSPS Cairo center in an e-mail I got from then director Hasegawa on 3rd March 2015. It said, “The 30th Anniversary celebration will be postponed, perhaps to November, and so it will become a primary task for you”. Preparations for the 30th Anniversary had already begun under director Hasegawa, and so with the support of the JSPS headquarters, the alumni association, the Japanese Embassy in Egypt, and the JSPS Cairo center itself, we intend to move forward with the celebration, even if imperfectly.

I should note that as a researcher I have been deeply indebted to the JSPS for its *Kakenhi* grant-in-aid programs and its Asian-African Science research programs. Still, working on JSPS public relations and managing the Cairo center have been quite challenging for me as a researcher of Islamic Architectural History. I had been wondering how I can best contribute to the 30th Anniversary celebration while residing in Cairo. When I visited Cairo at the end of 2014, Director Hasegawa gave me a list of the former directors of the Cairo center. The names listed are those of researchers who have often given me their kind assistance. And I heard from JSPS International Program Director Kato about how the JSPS West Asian regional center had moved from Tehran to Ankara to Cairo. I eventually had the idea of putting together a 30-year history of the Cairo center with input from its former directors.

I wish I had decided that earlier. I spent this summer doing survey work in Delhi and was busy preparing to present my findings in the fall. So it wasn't until early November that I asked the former directors for their submissions. The JSPS headquarters provided a list of Japanese nationals who had been dispatched to its centers in other countries. Using that list, I approached professors affiliated with the Tehran and Ankara centers. I also approached people affiliated with the Cairo center. However, given that it was already December, my success was limited. I would like to thank the many people who kindly shared their memories despite being asked at the last minute. Young disciples wrote manuscripts for the late directors. And Dr. Yoshimura, Dr. Kameya and Ms. Sugimoto of Organization for Islamic Area Studies, Waseda University mediate the exchange of mails for the late directors who don't use e-mail.

Pictures of two of Prof. Hanada's paintings are inside the front and back covers of this booklet. The front one is called “Muhammad ‘Ali Mosque and the Market”, and the back one is called “Picking Cotton”. The sections titled “Egyptian Joint Research” in “JSPS Programs for Japanese” and “Lectures, Other Events, and Publications” were written by Cairo center administrative assistant Ms. Kazumi Bando. As I mentioned before, the JSPS headquarters provided the list of Japanese nationals who had been dispatched to its centers in other countries. And the list of “Lectures and Events at the JSPS Cairo center (in Japanese)” was compiled by Ms. Bando. I had originally intended for this publication to be in three languages: Japanese, English, and Arabic. I regret to say that, due to time constraints, we have Arabic abridged versions of only two sections. For the English translation Ms. Hagar and Ms. Maha who graduated the faculty of Japanese Language, Ein Shams University, Ms. Bando and I translated the text from Japanese to English. Jeff Gedert, Waseda University translator and Mr. Michael Stark diligently reworded our English translations. For the Arabic translation, Secretary Sabrin and last Ms. Maha had done from Japanese to Arabic and Mr. Shawky, General Manager of Noon Center for the Arabic Language, reworded Arabic translations.

Preparing this booklet was a constant reminder of the many twists and turns in our fifty-year history of research and interactions between the Middle East and Japan at the JSPS West Asian regional center. Ideally, this booklet would contain the recollections of all affiliated individuals, and present them all in three languages. I hope some day a revised version of this booklet will do that. And I hope that the Cairo center will be continue forever.



16th Jan. 2016

二〇一六年一月一六日

٢٠١٦ يناير ١٦

